

---

# Sacrifice

サンタさん

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sacrifice

### 【Nコード】

N9789R

### 【作者名】

サンタさん

### 【あらすじ】

不真面目、やる気無し、駄目人間・・・  
生きていればそれでいいのです

ぜろ

これは誰しもが知るマブラヴの世界でも、ちよつと違うのは

変な男がいること

．．．あまり影響力は無いけど

．．．ぺったん、ぺったん、ぺったん

リズムミカルな乾いた音が部屋に響く

いや、ぶつちゃけ”ぺったん”じゃなくて、本人としてはダン！ダン！と、何に対して憎んでいるのかは知らないが、気合いの籠もった力で山のように積み重なった書類にハンコを押し続ける

「．．．一つ聞きたいんだけど？」

「ん？何？」

「いや、何って．．．俺の本業は”衛士”なんだけど？」

なーんでハンコ押し要員として使われているんですか？」

「べつに良いじゃない

アンタの衛士の実力って7割が周囲の勘違いで、残りの2割のうち1割が運で、最後の1割のうち半分が戦術機の性能で成り立っているから誰も困らないわよ」

「俺自身の実力が0．5％程度かよ．．．」

「否定は出来ないじゃない？」

「帰って良いか？」

「それ全部終つたらね」

「．．．そしてもう一つ」

「まだ何かあんの？」

「何で肝心のお前はくつろいでいるワケ？」

「何で天才の私がハンコ押ししなきゃならないわけ？」

「自称だろうが、仕事しろ」

「うつさいわねえ、このポンコツ人間」

「そこは凡人って言うてくれると、大分違うぞ？」

「あんたには贅沢だわ」

「．．．仕事のモチベーションに影響が出ました

今から効率が著しく低下します」

「じゃあ、今からアンタの階級3個くらい落とすわ」

「まさか〱ハンコ押し最高ですよ」

「じゃ、これ追加ね」

「．．．」

．．．どうやら、俺の目の前で偉そうに座っているこの女には血の代わりに、寒冷地仕様オイルが流れているようだ

誰かコイツ．．．香月夕呼に”気遣い”と言う言葉を辞書から引っ張ってきて叩き込んでくれ

「畜生め！やってやるよ！！」

俺はハンコ2個取り出す

ここからはリーサルウエポン、Dual H a n n k o を発動する！！

これでスピードは2倍になる！！．．．多分

「丁寧にやないと最初からやり直しね」

「．．．へいへい」

ぺったん、ぺったん．．．通常のスピードに戻ってしまった

「（くそう、これじゃいつまで経っても終わんねえぞ．．．しかも、つまんねえし飽きてきた）」

．．．そうだ、これで何かしらの曲を作ろう

現実逃避とか言ったヤツ、今からハイヴに突っ込んでこい  
さて、どんな曲にしてやろうか．．．

ぺったん、ぺったん、つるぺったん、社の胸も、つるぺったん．．．

メゴス！！

「ぷろぱん！？」

だ、誰だこのヤロウめ！

俺は後ろを振り向く、するとそこには・・・

「・・・」

「・・・」

ぶ、分厚い本を携えた幼女だと・・・

メゴス！！

「んぱろぷ！？何する社！」

「セクハラ・・・です」

「セクハラ以前にお前幼」・・・何でもないよ

君は立派なレディーだよ」

「・・・」

・・・なんて言うと思ったか！幼女め！！

レディーという言葉は、お前に百億兆年早いわ！出直してこ・・・

メゴス！！

「ぐあ！・・・今のが一番効いたぜ」

「何馬鹿な事やってんのよ、重<sup>しげ</sup>」

「・・・社が公務妨害を敢行してるんですけど？」

「アンタがろくな事考えていないからでしょ、ほら、仕事終了よ」

「おお、慈悲をくれるのか？ありがたや、ありがたや、夕呼大明神  
じゃ、帰るわ」

「待ちなさい」

ガシ！つと襟首を捕まれる

この女、狙ってやってないか？

「まだあんの？」

「あるも何も．．．帝国から手紙よ」

「俺は嫌だぞ！！あそこだけには行きたくねえ！！」

「まだ何も言つてないわよ」

「嫌だ！！何が悲しくて、お天道様が完全に上らないうちから働く地獄へ身投げせにやなんのだ！！」

「しょうがないじゃない、上層部の決定なんだから」

「ご、後生だ！この際ハンコ押しでも何でもやってやる！！」

「だからあそこだけは．．．ハッ！分かったぞ！巖谷のクソ野郎の根回しだな！？」

「あら、そこまで分かっているなら話は早いわね

さつさと逝つてきなさい」

「誤字発見！？」

「アンタ、本業は衛士だつていったでしょう？」

「言つたとも！でも、この際だから階級を一瞬だけ3つ、いや5つ位落として！そうすれば何とかなる！！」

「ああ、もうグダグダとうっさいわねえ

さつさと支度しなさい、この無気力怠慢駄目人間

でないと、アンタのあんな事やこんな事を基地中に広めるわよ」

「それ殆どデマだろうが！」

「別に私は構わないわよ？」

私の発言と大尉であるアンタの解釈．．．さて、みんなどちらを信じるのかしらねえ」

「こ、この鬼！お前には血も涙も無いのか！！」

「生憎アンタにはこれっぽっちも向ける余裕は無いわね」

「く、くそう！お先が真つ暗だ」

「分かつたなら支度しなさい」

「．．．分かつたよ、やりやいいんだろ？やってやらあ畜生め」

「分かれば良いのよ」

「んじゃ、俺は戻るわ」

「はいはい頑張つてねえ」

あそこだけはホントに勘弁して欲しいなー

まあ、俺も一軍人として頑張りますか・・・でも、やつば嫌だわ  
あそこはバケモノの巣窟だからなあ・・・下手すりゃ死ぬわ

俺？俺か

俺の名前は神無月重かなづきしげる

男盛りの39歳だ

おっさんとか言ったやつ、後でちょっと来いや・・・スミマセン、  
嘘です

これから、なにとぞヨロシク

## いゝち

みんなが右に行けば、自分も右に行く  
みんなが左と言えば、自分も左と言う  
みんなに着いていくのは楽だから良いけど、時々思ったことがある  
もし、みんなとは逆の方が気になったらどうすれば良いんだろう？

## 重side

はい、こんにちわ

国民を影から支え続けるみんなのヒーロー重お兄さんだよー

昼夜問わず、平和を脅かすBETAから日本を守り続けているのサ  
まあ、BETAってのは略称で本名は、”Being of the Extra Territorial origin which is Adversary of human race”  
”とかいう長つたらしい名前なのだ

取り敢ず、名付けた学者に一言言います

ばーか、ばーか！長すぎんだよ！！普通に”宇宙人”でいいじゃん、  
何カッコつけてんだよ！ばあか！

．．．ふう、ちよつとスツキリした  
でもこんなんじゃ、まだまだだなあ  
なんたつて、帝都に異動だぜ？

あそこには鬼が住むつて噂だ．．．何でも緑色の髪の毛を生やした  
双子みたいにそっくりな赤鬼が2人いたり、まるでこれダイヤモンドじゃねえのつて位堅い性格の長い黒髪を結った鬼があそこを根城  
にしているんだよなあ．．．あとついでに眼鏡掛けた角刈りの小うるさい野郎もいたな

心境は鬼退治に行く桃太郎じゃなくて、貢ぎ物の村人Aです



どう考えても四面楚歌だろ

あそこのみんなは横浜嫌いだからな、特にあの女のせいで

マシなのは、巖谷と紅蓮と鎧衣、珠瀬のロリペドジイくらいかな  
平均年齢高すぎじゃないか．．．？戦力的に不安になってきた

「まずいな．．．」

「何がまずいんですか？」

「ん？聞き覚えのあるこの声は、もしか．．．」

振り向いてみると、そこには．．．

おお！神は我を見放してはいなかった！

俺の中での女神様、あの性悪女が魔女なら、この女性、神宮司まり  
もはそれに立ち向かう穢れを

しらない聖女様だ

神様！今から貴方の信者となります！お賽銭でもお布施でも何でも  
捧げます！！さあ、そのあなたも

如何かな？

「聞いてくれよう、あの性悪女が俺を生け贄に捧げようとしている  
のですよ」

「そ、そうなのですか．．．というか顔が近いです、大尉」

「おお、スマンスマンつい昔の癖で」

「はあ．．．もう、今は任務中よ神無月先輩」

「そうそう、その響き良いね」

「取り敢ず、PXに行きましょう、話はそこで聞いわ」

「さんせー」

2人でPXへと続く廊下を歩く

まりもの隣に俺以外の誰かが歩いていたら、速攻戦術機で駆けつけ  
て八つ裂きにしてやるぜ

人生の勝ち組気分を味わっていたが、次の瞬間絶望が俺を襲った  
それはPXに着いてからであつた、2人で座る席を探していると、  
見慣れたヤツがいた、それも悪い方向の．．．その内の1人が俺に  
気づく

「あ！あれ大尉じゃん？おーい！こつちこつち！！」

「・・・」

俺は必然的にこめかみを手で押さえる、よりによってこいつ等とは・

神はどうやら裏切ったようだ、裏切るために信用させる・・・悪魔の所業だぜ、こりゃ

「ちよつとお、無視しないでよ、大尉

あ！神宮司教官、お久しぶりです」

何なんだ？この温度差は・・・

いや、何でコイツがこんな所にいる？

「神宮司教官、大尉に何かされなかった？コイツは・・・」

「スーパーチョップ！！」

「痛！？どこら辺がスーパー！？て言うか何すんのよ！！」

「やかましい！何でお転婆娘がこんな所でおせんべい嚙ってたんだよ！！」

「何よ！おせんべいつて、聞いたこと無いわよ！」

「ぐぬぬ・・・これが神の与えた試練か、ならば俺は神と戦ってみせようぞ！」

「ワケ分かんないこと言っでないで、大尉は仕事したらどうなの？駄目人間」

「その駄目人間の下にいるのはお前だけだな、速瀬」

「い、言ってくれるわね・・・」

「というかお前も仕事してないじゃん

やーい、やーい、サボリ、職務怠慢、胸だけ優秀なガキンチョ娘」

「KO・RO・SU・・・」

「おっ？何だ？やんのか？

光栄に思え、上官である俺が直々に相手してやんよ」

第一ラウンド開始だ！

見えないコングが音を鳴らしたのは気のせいでは無いはず

開始そうそう流れるようなコンボ技を繰り出す速瀬

フ．．中々やるな、しかし、それで俺を倒すなんざ煮詰めた砂糖にバニラパウダーを振りかけるより甘すぎるぜ！

「アンタと違ってこっちは任務帰りなのよ！！」

「奇遇だな、俺も先程ハンコ押しという重要任務から帰ってきたところだ」

「馬鹿にしてんでしょ！？」

「当たり前だ！ミスの許されない状況下でのハンコ押しだ！お前のやっているような偵察とはワケが違う！」

「うがー！！良いから一発殴らせろ！！」

はっはっは、直ぐ怒るのはお前の悪い癖だ

若さというのはどうしようもないな、もっと心に余裕を持たなければダメだぞお？

「隙あり！」

「何！？、ぐえ！！」

は、鼻っ柱に回し蹴りHIT！2300のダメージを受けた！  
某RPG初期場面では大ダメージだぞ！？

だ、だが戦いは始まったばかり、これから怒濤の反撃が始まる！

まりもside

目の前で神無月君と、かつての教え子、速瀬水月による格闘戦を繰り広げている

勿論2人とも本気じゃない、挨拶のようなものだ

「あ、伊隅大尉」

「ウソ！？」

「ウソだよ、ばーか！隙あり！！」

「え？きやあ！」

．．しかし、若い女の子にクロスチョップで飛びかかっている神無月先輩は正直変態にしか見えない

今年で確か、40歳なのに．．昔から何も変わっていないのね  
そのまま寝技に持ち込む、それはやりすぎじゃ．．本当に捕まる  
わよ、色んな意味で

「や．．この、放せ！」

「フハハハ！どうだ？抜けるものなら抜いてみる！」

「この変態！エロおやじ！放せて言ってるでしようが！」

「ん？聞こえないなあ、おにいさん生憎と耳が遠くてね」

更にきわどい体勢となる、傍から見たら既に強姦もの

一緒にいるA-01の反応も様々

「はわわわ、水月」

涼宮遙は、赤くなった顔を手で覆いながらも隙間からちらちらと見  
ている

「ちよ、ちよつと、誰か止めなさいよ」

涼宮茜は、姉の状況を見てあたふたしている

「さすが大尉、変態ぶりは今日も健在ですね」

からからと笑いながら宗像は、どこからともなくカメラを取り出し、  
撮影を開始する

「宗像、こんな状況で何やっている」

風間は宗像をたしなめるように言っているが、宗像は止める気配は  
ない

「通報しましょうか？その分、今いる大尉の席が空きますよ？」

柏木は冗談なのか、本気なのか分からないことを言う

他の築地、高原、麻倉は共に半笑いか苦笑いで見守っている

そ、そろそろ誰か止めないと．．

「随分と騒々しいな？」

その時、騒がしいPX内に凜とした声が響き渡る

「伊隅大尉！」

「．．．またあいつか」

呆れたような声を出すのも仕方ないと思う

重side

フハハハハ！

遂に来たぜ、マイ・ジェネレーションが！

この頃負け越していたからな、日頃の恨みを込めながらこのまま屈服させて．．．

メゴス！！

「あぶろば！？だ、誰だ！我が栄光の覇道を邪魔する不貞な輩は！」

「私の部下に何をやっている」

「伊隅大尉！？」

「チツ

伊隅四天王のNo.2か、予想以上に早かったな」

メゴス！！

「ぐあ！何する！」

「何だ？その物騒な名称は」

「いやお前自体武器が擬人化した．．．」

「．．．速瀬、少しどいてろ

あと宗像、そこにある椅子を取ってくれ」

「了解」

「冗談に決まってるじゃないですか」

「残念だ、もう遅い」

撲！！

「ぐえ！」

「い、伊隅大尉、やりすぎでは？」

「神宮司軍曹、心配はいらない

この男、その程度では死にはすまい」

「殺・す・気・か！！」

「．．．本当ですね」

「当たり前だ」

「くそう．．．糖分だ、この女と戦うには糖分が圧倒的に足りない  
おばちゃん！トロピカルパフェ！」

「そんなメニユー無いよ！

と言うか、あんたの健康診断で血糖値があり得ない数値を叩き出  
してんだ

あつたとしても出さないよ！」

「そんな薄情な事言わんといて、俺とお姉さんの仲じゃん」

「もうその言葉には騙されないよ」

「．．．チ、聡いババアめ、何時の間に学習しやがった？」

「なんか言ったかい？」

「何でもないよ」

「大尉」

「任せてください」

「ん？」

撲！！

「ぐえ！」

「その前にお前は仕事しろ

副指令から帝都異動を命じられていたんじゃないか？」

「え！そうなの！？」

「何か問題があるのか？速瀬」

「い、いえ、何でもありません」

「あ？それがどうした？」

「早く出発の準備しないと、副指令のことだ、簡単に予想はつかないか？」

「・・・つく」

「なら、こんなところで漫才に興じてて良いのか？」

「お、覚えてる！お前に言われて準備するんじゃないんだからな！  
！」

「分かったから、サッサとしたらどうだ？」

「こん畜生め！」

本当に覚えてる！いつか借りは返す！

と、言いそびれてPXをBダッシュで後にする

そんな台詞、舌かんで言えんわ

・・・それにしても、暫くこことはさよならかあ  
ちよつと寂しい

ほんのちよこつとだけだな？

に  
い

人間って、自分の損失に敏感な生き物だ

例えば、どんな慈善行為でも結局は誰かに見返りを求めてしまう  
でも、それが人ってものだろ？俺だって、ただ働きは嫌だし．．

重 side

はあ．．

どうも、毎度ありがとうございます

神無月印の重食品です

とうとう帝都異動の瞬間がやって参りました

俺は鬼さん達に引きちぎられて、内蔵はオモチャ代わりにさせられるようです

なに？大袈裟だと？

馬鹿言え、俺が帝都でなんて呼ばれているか知ってるか？

結構沢山あるが、大きく分けて3つある

”臆病者”、”裏切り者”、”売国奴”

こんな感じで言われている

要は、日本人の面汚し．．これがプライドの高い連中の言い分だ  
別に否定はしない、多分過去の経歴を言っているんだから仕方ない  
否定するだけの材料もないし、何より目の前に佇む”コレ”も原因  
している

何時だったか、夕呼に突然呼び出されたかと思うと、急に目の前の  
コレに乗れと言ってきた

何でも、米国からの手土産らしいが、こんな物を送りつける米国の  
考えていることが分かん

これまでから察するとおり、コレとは戦術機である



しかし、問題はそこではない

問題は米国ご自慢の戦術機、F-22A・ラプターのプロトタイプ、2機造られた内の一機・・・”N22YF”であるからだ

「・・・」

マジで勘弁して欲しい

なんでこんなある意味、国家のトップシークレット級の代物を送りつけてくるかなあ・・・何か裏では色々汚い思惑が渦巻いてそうだ・・・何だか、この戦術機も汚く見えてきたぞ？

血のように赤いカラーリングも相まって不気味に見えてきたぜ

よりによって赤だからなあ、周囲の視線が痛いぜ

穴だらけになりそうだ・・・主に俺の胃が

・・・て言うか何時から赤になったんだっけ？

最初にご対面したときはスカイブルーだったのに、次の日にはあ不思議

まったく逆の深い赤に早変わり・・・あのクソ女、一体どんなマジックを使いやがった？

これがもつと明るい赤だとまだ良いが、この赤は本当に血のようなのだ

まるで誰かの返り血を浴びたように・・・と言うかもうコレ完全に誰かの血じゃね？

あの女も遂にトチ狂ったか・・・かわいそうに

・・・待てよ、とすると後々アイツのとばっちりが俺にも降りかかるのか？

やっべえ、また国外逃亡してえな・・・いやそんなことしたら、今度こそ殺される

やっぱあの時帰ってこなければ良かった、何が帝国のピンチだよこん畜生・・・

帰って早々頑張って戦ったつてのに、作戦終了後に拘束されて軍法会議にかけられるわ、そこを旧友のあの女に拾われて毎日扱き使われる地獄を味あわせられるわ、全然良いことねー

ホント、どうするかなあ．．．

## 日本帝国陸軍技術廠

### 巖谷 side

彼を知るものは、皆口を揃えてこう呼ぶ

”臆病者”．．．と

彼の訓練生時代を知る教官ですら、100年に1人いるかいけないかの”出来損ない”だそうだ

まあ、あいつはよく訓練を抜け出したり、サボったりしていたからな．．．ある意味自業自得と言える

しかし、軍の連中に必要以上に嫌われる理由は別にある

あいつ、神無月重は戦術機の応用課程が修了した後、突然国外逃亡．

．つまり、亡命したのだ

あいつにも色々理由はあったのだろう．．．しかし、けろっとした顔で帰ってきたときには度肝を抜かれた

昔からの知り合いである俺は、あいつにこう言った「死ぬ気か？」としかし、あいつはいつも通りのとぼけた顔をして「だって、ピンチなんだろう？俺だって日本人だぜ？例え一度棄てた祖国でも、恋しくなつて帰ってくるときはあるさ」と、呑気に抜かした

何でも亡命した後は、大した職にありつかなかったからと言って各国を転々としながら戦術機を借りて前線でBETAを相手にしていたらしい．．．ホントかどうかは知らんが

さて、話を戻すが、作戦終了後のあいつは案の定拘束された

銃殺刑になりそうだったところを、横浜基地の副指令があいつの身柄を引き取った

何でも、俺よりももっと昔の知り合いらしいが．．．

まったく、凄いんだか、そうじゃないんだか分からないのがあいつの困ったところだ

「やれやれ」

その問題児が帝都に来るんだ、味方くらいはしてやるさ  
あいつへの風当たりは最悪だが、めげるなよ．．．重

重side

やべーよ、来ちまったよ

どうすんだよこれ．．．

まずは巖谷のところに行かないと、いつ後ろから刺されるか分かつ  
たもんじゃねえ

さて、問題はどうやって巖谷のいる建物へ潜入するかだ  
ここは帝都、当然顔見知りと鉢合わせする可能性が高い

他のヤツはまだしも、特に月詠姉妹や沙霧の頭でつかちとうっかり  
会ったなんてしたら洒落にならねえ．．．

し、仕方ない．．．動かなければ何も始まらないしな、腹を括って  
潜入するか

．．．したのは良いのだが、現在俺は身動きが取れない

「どうすんのよ、これ」

何故かというと、建物内に入ったのは良かったが、人の往来が激し  
すぎるのだ

咄嗟に近くの物置部屋に入って鍵を掛けたが、人は増えるばかり．．

．あれよあれよという間に身動きが取れなくなってしまった

「お前ら仕事しろよ．．．」

演習でも何でも好きにしてくれ、俺に被害が及ばなければいくらで  
もやってればいいのに．．．

そんな呪詛を心の中で吐きながら、暫く息を潜めていると．．．

「！（お、鎧衣！良いところに来た！）」

帝国なんたら省の課長である鎧衣が目の前を通った

よっしゃ！コイツが来たからにはもう安心．．．

「これは．．月詠中尉、任務ご苦労様です」

「！！」

「左近殿か、苦労を掛ける」

ま、まじかよ．．赤鬼の片割れがそこにいんのか？

迂闊に飛び出さなくて良かったぜ

「．．．」

「．．．」

2人はそこで会話を始める

一難去ってまた一難．．苦労が絶えないぜ

「．．．そう言えば、左近殿はご存じないだろうか？」

「何ですか？」

「近い内、あの裏切り者が帝都に来るという情報を耳に挟んだのですが．．．」

「はて、初耳ですな」

「そうですか、いや、詰まらぬ事を聞きました」

「いえいえ、滅相もない」

「．．．では、私はこれで」

「．．．月詠中尉」

「何でしょう？」

「もし、今の話が本当だとして、この帝都で彼と出会ったら．．．どうしますか？」

「．．．然るべき報いはいつか受けて貰う、それだけです」

「はっはっは、これは手厳しい」

「．．．以上です、失礼いたします」

「．．．だ、そうだよ、重君

安心したまえ、月詠中尉は行っただよ」

ガチャリ．．．とドアを開き、中から出る

「あんの、クソアマ．．．物騒な事を言いやがる」

「相当嫌われたものだね、仕方なしと言えば仕方はないが．．．」

「まあ、あながち間違いじゃねえけどな．．．」

寧ろそっちの言い分は痛いくらいに伝わってくる．．．  
出来れば、和解したいとも思う．．．

でも、今の俺には出来ない．．．それだけの勇気が無いからな

「で、どうするかね？巖谷中佐の所へ行くかい？」

「そうする」

「では、着いてきたまえ」

「はいよ」

だったら俺は今のままで良い

たとえ”裏切り者”と罵られようと、そっちの方が幾分か気が楽だからな

本当に、ダメ人間だな．．．俺という生き物は

月詠side

神無月重．．．

私が、いや．．．私たちが一生の内唯一許すことの出来ない生き物  
国外逃亡という守るべき祖国を棄てる愚行に及んだ屑

それだけで許し難いというのに、ぬけぬけと帰ってきた挙げ句、この日本国内で、今でものうのと生きている

その様を見ているだけで私は反吐が出そうになる、あの男には天誅を下すべきだ

最早、生きている価値すらない

だと言うのに、あの男は生きている．．．生かされている  
処刑が決定した間際、突然それが取り消しとなった

横浜の魔女が奴の身柄を引き取ったのだ．．．それを承諾した帝都  
上層部

「本当に．．．忌々しい」

あのような生き物は、此処帝国にとって害にしかない

いつか、奴の命は貰い受ける

今は無理だ、そこまで私は暇ではないし、あの男に割く時間など惜しすぎる

ならば精神を切り替え、次の任務に集中しなければ・・・

さん

見たくないから目を逸らす．．．  
聞きたくないから耳を塞ぐ．．．  
言いたくないから口を閉ざす．．．  
その気持ちは解らなくはないけど、そんなことを続けたら後悔しか  
残らないぜ？  
俺みたいにな．．．

重side

どーも、毎度お馴染みの神無月重です

取り敢ず話しかけないでくれ、今はそれどころじゃない

「．．．」

「．．．」

「．．．」

「．．．」

カチャカチャ．．．タン！

「それロン」

「何！？」

「はっはっは、覚悟しろ巖谷、貴様のろうそく並みの寿命は俺が貰  
い受ける」

「ついに巖谷も餌食となったか」

「今日の大尉は恐ろしいつすね．．．」

当然だ整備兵Aよ、今の俺を止められる存在はどこにもいない

未だトップ独走中、箱根駅伝も今の俺なら敵無しだ！

「さあさあ、どうする？カモ共、大人しく掛け金全部渡してひれ伏  
すか、このまま続行して軍資金が尽きてから我が軍門に下るか．．．

「さあ選べ！」

まさに二者択一！これこそオルタネイティブだ！

．．何を言ってるんだ俺は

「くそ！このまま引き下がれるか！倍プッシュだ！！」

「はっはっは、遂に特攻隊と化したか

後腐れ無く念入りに成仏させてやる、さあ来いや！！」

だがその時、ある変化が訪れた．．．

「！」

「！」

「！」

「ん？どうした？」

「い、いや、何でもない．．それより」

「私は此処でお暇しよう、さらばだ」

「じゃ、じゃあ自分も仕事に戻りますんで．．」

「？」

掛け金は手に入ったが、何か釈然としないな

うーん、なんでだろう．．．

ガシ！

「大尉、お久しぶりです」

「ん？誰だあ？」

くるり、と振り返る．．．

「（やっべえ、唯依ちゃんだ）さ、さあ仕事仕事」

「待って下さい、どこに行くおつもりですか？」

「ど、どこって．．これからお仕事．．」

「ついさっきまで麻雀をやっていたのにですか？」



「うゝ．．．スイマセン」

「大体あなたは．．．．．」

く、くそう．．．あの3人め、唯依ちゃんセンサーがある種の境地達していやがった

ちよつとくらい知らせてくれても良いのに．．．調子に乗りすぎたか

「聞いていますか!」

「ハイ!まことに申し訳ないです!」

「では、今私が言ったことを一字一句誤り無く言えますね?」

「お、鬼!?」

「何か言いましたか?」

「い、イエ．．．ナニモ」

そのあとクドクドクドクドクド．．．

お説教という名の拷問は何時間にも及んだぜ、今度からは少し自重しよう．．．

唯依 side

裏切り者．．．

それは、目の前にいる彼を侮蔑する言葉だ

当然と言えば当然である

私も未だ彼を完全に許すことは出来ない

でも、彼は文句1つ漏らさずにそれを受け止め続けてきた

私と彼が出会った最初の頃は酷かった

今思い出せば、大人げなかったと思う

ある時はハンガーの裏で煙草を吸っていたので、口から取り上げて消化した

『ああ!お、俺の相棒が!?』

『大尉、ここは禁煙となっています』

『お、仰るとおりです．．．』

ある時は食べ歩きをしていたので、これも取り上げて咎めることもあった

『大尉、飲食物の持ち込みは禁止です．．．PXへ行って下さい』

『で、ですよねぇ』

ある時はコソコソと人影を伺っていたので、声を掛けることもあった

『大尉』

『おおぅ！ってなんだ、唯依ちゃんか』

『なんだとは何ですか？ 疚しいことが無いなら、堂々としていたらどうです？』

『まあ、そうなんだけどさ．．．』

『はつきりして下さい』

『スイマセン．．．』

多分、ほぼ八つ当たりに近い感情で彼に当たっていたと思う

でも、あることが切っ掛けで、彼も相当苦悩と後悔にさいなまれ続けていたことを知った

それは認めても良いと思う

『どんな事をして、過去の免罪符になるワケじゃない．．．なら、俺はサクリファイスでいいさ』

あの時の彼は、触れれば壊れそうなほど儚く、切なかった．．．彼が見せた不器用な笑みが今でも頭に蘇る

『聞いているのですか？ 大尉』

『き、聞いております．．．はい』

『大体貴方は．．．』

まったく、ちよつと目を離すとすぐこれだ．．．困った人である

彼は．．．今までも、これから1人で戦い続けるだろう

ならば、ここにいる間は少しくらい支えになってあげても良いだろうか？

重side

く、くそー．．．巖谷め、恨むぞ

「どこに行やがった、あんにやろうめ．．．」

「おお、唯依ちゃん行っただか」

「行っただかじゃねえよ、この野郎」

「はは、悪い悪い、随分と絞られたな？」

「限界まで絞った後、もう一捻りしたからな

若干濡れた雑巾みたいになっちまった」

多分今体重計のつたら2キログラム減ってる気がする

．．．これダイエット法として売り出せねえかな

「．．．それにしても、唯依ちゃんのお前に対する角も随分と丸くなっただんだ」

「．．．まあな」

「どうした？素直に喜べよ」

「嬉しいような、そうでないような．．．」

「まだ気にしてるのか？」

「当たり前だ、もう少し恨んでくれても良かったというのに．．．  
こっちが気まずいわ」

「お前ってどこまでチキンでヘタレなんだか．．．」

「やかましい」

「事実だろうが」

「ぐ．．．」

「さて、お喋りはここまでにして、本題に移ろうか」

「本題？」

「お前．．．わざわざ俺が麻雀やらせるために横浜から呼んだと思  
ってるのか？」

「飯にそうだったらお前を血祭りに上げる

どう考えても割に合わん」

「当たり前だ、まったく．．．」

今回呼んだのは、お前のある戦術機に関する意見を聞きたかったんだよ」

「戦術機？プロトタイプ・ラプターは無理だぞ？秘密厳守だからな、言ったら俺が殺される」

「違う違う、TYPE-94・不知火だよ」

「お前、結構長い間乗ってだろう？」

「何だ、アレかよ．．．」

「簡単簡単、何というか．．．普通。みたいな？」

「根も葉もないようなこと言うな、お前は具体的すぎるんだよ」

「えーなんでだよ、もう平凡すぎて逆にケチの付けようがないんだよ」

「まあ、強いて言えば．．．そうだなあ、何というか．．．うん、普通。」

「結局はそれかよ！？」

「別の観点から見れば、それ以上にはならないだろ？  
それ程まで極めすぎて、逆にそれがネックになってるな

時代の波に押し流されそうだ、その内外国機導入とかするんじゃないかねえの？」

「ふむふむ、成程．．．たまには真面目な解答が出るじゃないか」

「たまにはってなんだよ、馬鹿にしてんだろ？」

「日頃の行いを悔い改めてから言え」

「酷え！？」

「他には？」

「うーん．．．ない、後は沙霧のあたまでつかちがいるだろ？」

「そいつに聞けよ、乗ってる年期はあいつの方が長え」

「俺、あいつ苦手」

「ええー具体的過ぎるだろ、お前の方が．．．」

「だからこうしてお前に聞いているんだろ？」

「ダメだこのおっさん、色々な意味で間違っている．．．」

「ま、お前から真面目な意見が聞けたから良しとするか」

よし、帰って良いぞ？」

「ケンカ売ってんの!？」

「冗談冗談、ちゃんと衣食住は手配する」

「まったく．．．ん？」

俺っていつ帰れんの？」

「ああ、1つ言い忘れた

お前多分その内アラスカに飛ぶ

日程は後から知らせる」

「．．．は？」

「そういうことで」

そう言う大事なことは早めに言ってくれよ．．．なんだよ、アラスカって

心の準備が未だ出来てねえよ．．．

しい

”人”は偉大だ

何だつて創り出せる、どんな物でも生み出せる

”人間”は馬鹿だ

自分勝手な理由で積み上げてきた物を崩す、築き上げてきた物を壊す  
同じ”ヒト”なのに、どうしてこうも違うのかねえ．．．

重side

どーも、重です

シッ！馬鹿、声出すな！気づかれんだろ！

「くそ！あの野郎どこ行きあがつた！？」

「．．．」

チッ！巖谷のヤローめ、中々しつこいな．．．

俺は嫌だぞ、アラスカなんざ行きたくねえ

とつと横浜に帰してくれ．．．

「．．．行つたか」

シユバつと参上、隠れていた箱から出る

馬鹿め、ステルスごっこしている俺を見つけたすなんざ100年早い

「はっはっは、勝った」

「何に勝ったんですか？」

「はっはっは、それはな．．．は？」

や、やっべえ．．．まさか

「．．．」

「．．．」

ゆ、唯依ちゃんだ．．．逃げよう

「な、何でもないですよ」

独り言独り言．．．」

「そうですか．．．そういえば、先刻から巖谷中佐が貴方を捜していますよ」

「な、何のことかな．．．「見つけたあああ！！」ゲツ！見つかった！？」

「もう逃がさんぞ！観念しろ！」

「くそ！捕まつてたまるか！」

「唯依ちゃん！確保お！」

「了解！」

「ズ、ズリイ！？」

「隙ありだボケ！」

「何！？」

「はっはっは！大人しくしろ！」

「い、嫌だ！俺はここに残る！」

「言うか早く横浜に帰して！？」

「この任務が終わったらなあ！」

ズルズル大の大人が引きずられる様はさぞかし絵になるだろう

気分はドナドナ、お先真つ暗闇、どこに出荷されるやら．．．アラスカだったな

．．．しばらくお待ち下さい．．．

「．．．もう此処まで来たら逃げねえから、この縄ほどけ」

「アラスカに着いたらな」

「て言うか何でアラスカ！？」

「俺何も聞いてないけど！」

「いいから黙って行ってこい、お前の職業柄お得意だろうが」

「どんな職業だよ」

「知ってるぞ、お前昔は”Bloody Eater（血を啜る者）」

”とか呼ばれていたそうじゃないか」

「そ、それだけは止めて！メツチャ恥ずかしいから！」

「どーしよーかなー！これ以上愚図るなら帝都全員に言いふらしちやおうかなー！」

「ち、ちくしょう！分かったよ、行けば良いんだろ、行けば」

「最初からそう言えよ」

「おのれ．．．末代まで呪うぞ巖谷」

「はいはい、分かった分かった」

「お前の戦術機も向こうに運ぶから、そこんとこよろしく」

「．．．冗談じゃねえ、壊したらマジで俺が殺される」

「壊さないように頑張れ」

「掛ける言葉がそれだけかよ．．．」

「お前に優しい言葉を掛けるとつけ上がるからな」

「ひでえ．．．」

「ま、死なない程度にやれ．．．それ程難しい任務でもない、正直お前にピツタリだ」

「へいへい、んじゃ行ってくるわ」

「お土産宜しく」

「死ね」

捨て台詞を吐いてひかうきに乗る．．．飛行機のことねやれやれ、結局乗っちゃったよ

久しぶりに国外に出るな．．．

またバックレようかな．．．いや、止めとこう、流石にそれはマズイかな

巖谷 side

「．．．行っただか、出てきて良いぞ篁中尉」

「．．．！！」



い、いつからお気づきになっていたのですか？」

「ずっと前から、まっ、重（あの馬鹿）は素で気づいていなかった  
ようだが・・・」

「・・・申し訳ありません」

「別に謝ることでもないだろう？」

「・・・」

「やっぱり心配か？」

「ッ！そんなわけでは！！」

「わっはっはっは、怒るな怒るな」

「からかわないでください！」

「・・・まだ許せないか？あいつのことを」

「・・・当然です」

「やれやれ、難儀だな」

「あの、中佐」

「何だ」

「Bloody Eaterとは・・・？」

「ああ、ちよっとしたあいつの2つ名だ」

「ここ日本じゃ知ってる者は少ないだろう、何故なら、あいつから  
は誰も連想できないからだ」

「だが、国外ではちよっとした有名人さ、戦場を渡り歩いては常に  
最前線で戦う・・・そんな後ろ姿が良くも悪くも、尾ひれが付いた  
んだろう」

「・・・なぜ、大尉は国外逃亡したのでしょうか」

「簡単だよ、あいつの考えていることは広いようで狭く、深いよう  
で浅い」

「大方、その頃の重は恐くなったんだろう・・・死ぬことが、あ  
いつは特にそういうのに対して敏感だからな」

「なんて情けない・・・！」

「・・・でもな、それは誰しも抱くモノなんだよ、要はそれを克服  
できるか否か」

戦場では出来なかつたら死に、そうでなかつたら生き残る

大抵の者は前者で散っていつてしまう．．．だが、それは戦場という一括りの中で見たものだ

だからあいつは、戦場に出ない．．．自分が衛士として消耗されない国外へ逃げた

ま、結局は無駄だったかな

「．．．」

「まあ、あいつ自身恨んでも構わないと言っているんだ、そう深く考えることでもないさ」

「そう．．．ですか」

「さて、重の話はこれで終りだ

ここから切り替えるぞ、篁中尉」

「ハッ！」

「これから、例の新兵器のテストを行う

任されてくれるな？」

「了解しました！」

こっちもこっちで始めるぞ、そっちも頑張れよ．．．重

重 side

「ぶえつくしよい！．．．グズ．．．」

．．．くしゃみが止まらん、何でだ？風邪か？

まあ、いいや

「それにしても、のどかなところだね」

いいなあ、俺ここに住みてえ．．．

ひっそりと小屋造って川で魚釣ってればいいよ、鉄の塊動かす技術なんてぶっちゃけいらねえし

サバイバルスキルの方が欲しいところだ

あー何か森の向こうに見えてきたし．．．完璧基地だろ、アレ．．．  
何だっけ？ユーコン基地．．．だっけ？

ええい！この際ポップコーンでもコーンポタージュでも何でもいいや  
「は．．．憂鬱だねえ」

まあ、頑張りますか．．．疲れない程度に

「遠路はるばるご苦労様です」

「はいはいどうも、ご苦労さん」

すると、見知った顔が1つ

「お久しぶりです」

「おお、イブラヒムの旦那！おひさ〜」

「相変わらずですね、あなたは」

「なんだ？その堅っ苦しい挨拶は、別人みたいだぞ？」

「はあ、ここは軍ですよ、上官に敬語を使うのは当然です」

「え？旦那の階級は何？」

「中尉です」

「勝った、俺大尉」

「それを聞いたときには俄には信じられませんでした」

「ケンカ売ってんの！？」

「冗談ですよ．．．トルコを出た後はどうしてました？」

「．．．いつも通り、各地を転々としていたよヨーロッパから中東  
アジアまで幅広くな」

「よく生きていましたね」

「まあ．．．な」

「どうでしたか？」

「どう考えても俺じゃ力不足だ、世界中を回ったが．．．酷いもんだ、  
援軍と避難が間に合わずに目の前でBETAに滅ぼされた街さえあつた」

「そうですか．．．」

「まっ、辛気くさい話しは止めようや」

「そうですね、取り敢ずは屋内にご案内しましょう」

「ん、ヨロシク」

「では、此方です」

と、案内された軍用ジープに乗り込む

．．．乗り心地悪ッ！

がったんがったんシェイクされて車酔いしそうだ

「．．．そう言えば、さっそく任務がありますよ」

「ん？何？」

「護衛任務です」

「何の？」

「近い内に、西と東の広報任務があるのですが、万一に備えて撮影班の護衛らしいです」

「お守り役ってか？いいねえ、そういう楽な仕事は大歓迎だ」

「．．．真面目にやってくださいよ」

「はいはい、分かってるって」

「はあ、これから”アルゴス試験小隊”に貴方を紹介します」

「何それ？」

「何それって．．．まあ、説明するより貴方には見せた方が早いでしょう」

と言われた

全く意地悪な旦那だな

しかし、アラスカか．．．何か楽しそうだ、任務も楽で済みそうだし、最高だな！

こゝお

泣くな、黙ってやれ  
喚くな、口を閉じろ

．．死ぬな、ただ、それだけだ

昔、雇い先の上官に言われた言葉だ

ホントに碌でもねえ良い女だったよ、嫁に欲しいくらいだ．．．  
まだ生きてっかな？

??? side

「なあなあ、今日来るヤツってどんなだろうな？」

「おっ！珍しくタリサが食い付くね」

「うつさいVG！」

「へぶ！」

「そうねえ、確かニホンの衛士だって耳に挟んだけど．．．」

「ニホン？じゃあ、あれか？武士道ってやつか？」

「なんだそりゃ」

「なんだ、しらねえのか？」

「知らん」

3人がそれぞれ話し合っていると、いきなりバン！と扉が開く

「諸君、待たせたな」

「．．．！！」

部屋にイブラヒム中尉が突然入室してきた．．．にも関わらず、3人は敬礼をこなす

腐っても軍人、そこんとはしっかりする

「今日は新しくこの隊に配属される人物を紹介する．．．スペシャ  
ルゲストだぞ」

かの有名な” Bloody Eater ”と称される衛士だ」

「……!?’」

3人の顔色が変わる

それもその筈、 Bloody Eater とは最古参に数えられる衛士の1人であり、結構有名である

神出鬼没、正体不明、現れては前線に出て戦う……

まるで、血を求めるように戦場を彷徨う姿から” Bloody Eater (血を啜る者) ”と、いつしか呼ばれるようになった

……本人にはそんなつもりはなく、ただ単に身元がバレると何となくやばそうだから1つの場所に留まらずに転々としていただけで、決して血を求めているわけではない

そうとはつゆ知らず、風評とは恐ろしいモノである

「では紹介しよう……神無月重大尉だ」

ゴクツと、そこにいる全ての人間が喉を鳴らす

しかし、名を呼ばれても入室してこない

「……はあ、まったくあの人は」

「……」

「何をしているんですか？」

「え？何？もう入って良いわけ？」

「さっき貴方の名前呼びましたよね？」

「ワリイワリイ、聞いてなかった」

「全く貴方という人は……さあ、入ってください！」

「そんな乱暴すんなよ、ソフトに扱ってくれよ」

「寧ろベリーハードで扱ってあげます」

「いてっ！引っ張るな」

「では、キリキリ歩いてください」

「何に怒ってんの？」

アレか？格好良く紹介をしたのは良いけど、俺がタイミング良く入っていなかった事についてか？」

「聞こえていましたね？」

「いででで！」

「それを承知の上で入ってこなかったと．．．」

「そうカリカリすんなよ、出来心だったんだって、ほら、よくあるでしょ？」

俺の中の悪魔が囁いてきたんだよ、”ここは敢えてシカトしようぜ”って」

「ほう？それで？」

「．．．うん、ごめん、ふざけすぎました、ハイ」

「まったく、では早く入ってください」

「へーい」

やる気のない声と共に入室してきたのは、何ともだらしない男性であつた

着崩した制服、顎の無精髭、覇気の籠もっていない死人のような瞳

．

お世辞にも、イメージしていた人物とは違う

「どうも、神無月重でーす

階級は大尉、別に気にしなくても良いけどね」

「．．．．．」

「何だあ？お前ら、その嫌々な沈黙は」

「（貴方のせいですよ．．．）」

「質問するなら今のうちだぞ」

ああ、プライベートはダメね、俺こう見えてピュアだから」

「．．．ひ、1つ良いですか？」

「はい、その君？ホワッツ・ユア・ネーム？」

「ヴァ、ヴァレリオです」

「はいはい、ヴァレリオ君ね．．．何かな？」

質問は1人10秒くらいで済ませて貰うとお兄さんは助かるなあ」

「（いやいや、あんたお兄さんどころじゃねえよ、完全におっさんだよ、そこんとこ自覚してんの？このおっさん）．．．い、いやあ、何て言うか、イメージと違うなあって．．．」

「ほうほう、どの辺りが？」

「何て言うか、おっさんってホントにBloody Eaterなのか・・・」

「とう！」

ズビシ！

「あだ！」

「ひとつ、俺はおっさんじゃない、”お兄さんだ”

ふたつ、そのこつ恥ずかしいシヨンベンくさい名前、俺の前では禁句だ

みーつつ、俺はおっさんじゃない！お兄さんだ！！」

「（2回言った！？）」

「分かったか！？」

「Yes, sir！」

「よろしい」

「ち、ちなみに歳は・・・？」

「ん？23」

「（完全に今嘔吐いたよこの人、平然とした顔で嘔吐いたよこのおっさん）は、ははは、お若いですね」

「そうだろう」

「大尉、嘘を吹き込まないで貰いたい

貴方今年で40でしょう？」

「旦那は俺に何か恨みでもあんの！？」

「（やっぱりおっさんだった！？）」

「特にはありませんが、履歴を偽るのはよくないことかと」

「そんな意地悪なこと言っなよ」

「・・・」

「何故そこで押し黙る」

「いえ、まあ、お喋りはここまでにしようかと・・・」



「ん？まだ何かあんの？」

「ええ、ちよつと歓迎会を」

「ほう、そりゃ楽しみだ」

「私も楽しみでなりませんよ」

## 重side

『こちらアルゴス2、さつさと掛かって来いよ大尉殿』

『こちらアルゴス3、楽しみましようぜ？大尉殿』

『こちらアルゴス4、いつでも行けます』

「・・・てめーら、何でそんなに楽しそうなんだよ」  
だ、だまされた・・・

歓迎会というから楽しみにしてたら、あれよあれよと言う間に戦術機に乗っていた

どうやら、対人模擬戦闘をやるらしいが、これアレだろう？

よく学校の先輩とかが、入り立てピチピチの小生意気な後輩を校舎裏で袋だたきにするっていう・・・

・・・所謂リンチだろ、これ

マジで旦那は俺に恨みでもあるんじゃない？

トルコ戦線にいた頃なんかしたか？俺・・・やべーよ、逆に思い当たる節があるから恐いんだけど

きつとこれを機に復讐するつもりだよ、旦那は・・・

『およ？もしかして大尉ビビってんの？これじゃあ、Bloody Eaterも肩すかしだな』

「あーハイハイ、直ぐにぶちのめしてやるからちよつと待ってる  
て言うかお前、俺の前でその名前口にしたな、前前前のトリプル  
コンボ俺に言わせあがって、お兄さん怒っちゃうぞ？

謝んなら今のうちだよ？ん？」

『誰が謝るかこのおっさんめ！』

「ほっほっ、良い度胸だ、お兄さん完全に怒ったわ」

『だからおっさんだろ！？今年40の工口おやじが何見栄はってんだよ！何が23だよ、見苦しいんだよ！』

「こんちきしょう！！黙って聞いてりゃ、おっさんおっさんって！本人がなあ、頑張ってお兄さんっていつてんだからそれで良いじゃん！空気読めよ！」

『ムリがありすぎるんだよ！現実と向き合え！おっさん！』

「こ、この幼女め・・・許さん」

『誰が幼女だ！』

「お前のことだよ！お前こそ現実と向き合え！そんなんじゃ、一生そのままだよ！」

『アタシは育ち盛りでこれからなんだよ！』

「俺も男盛りでこれからだよ！」

『もう人生の折り返し過ぎてんのに！？』

「うるさいよ！ようは気持ちのもちようだよ、いつだって俺は20代だ！」

『そこらへん現実と向き合えっていつてんだよ！いつまでそれ貫き通す気だ！？』

「無論！死ぬまで！！」

『死に際に20代って言うジジイは気色悪いわあ！！』

「何だとコラア！お前もいずれはそうなるんだよ！」

『いい加減にしろ！』

『！？』

「！」

『はあ・・・始めても宜しいですか？』

『りよ、了解』

「はいはい、どうぞ」

『では、状況開始！・・・それにしても大尉』

「何？何か用？」

『貴方がラプターに乗ると、案外シニールですね』

「うるさいよ!？」

『冗談です』

「それだけ!？」

『失礼します』

「...」

くそう、旦那め、完全に馬鹿にしてやがる

こうなったら、頑張るしかねえじゃん

これ負けたらあの幼女+2に、絶対馬鹿にされる

こりゃあ、負けらんねえ...

ろく

”努力は才能に勝る”なんて、どっかの誰かさんに言われた  
そんな言葉、俺には気休め程度にしか聞こえない．．．  
だって、凡人の限界なんて高が知れてる、結局は才能との埋まらな  
い差を痛感してどんどん堕ちていく  
ならば、凡人には凡人なりのやり方がある  
一々正々堂々真っ正面からぶつかり合う必要は無いと思うなあ．．．

重side

どうも、元気になっていましたか？

毎度の如く、しつこいくらいお馴染みの神無月重です  
え？模擬戦の結果はどうなったって？

今闘ってたよ、気が散るだろうが

まあ、皆さんが予想する通り絶賛戦闘中です

「はっはっは、どうした？タリサ君

大口叩いた割には、僕一発も当たってないんですけど？」

『ッ！うるせえ！』

「無駄無駄、全とお見通しだ」

『こ、この変態野郎が．．．』

「吠える吠える、キャンキャン吠える

駄犬幼女め」

『．．．殺す』

そう、何と俺は一発も被弾していないのだ

ふっ、どうだ俺の操縦テクは．．．ぶっちゃけて言います、それ程  
余裕無いです

回避に全神経やら細胞やらを総動員してるんだわこれが

攻撃してる余裕なんてねーよ

下手にしたら距離詰められてあばーん！だ

その証拠に、俺の網膜ウィンドウの残弾数は常にレギュラー満タンとにかく距離を離すことに専念中、そこ！チキンプレイとか言うな

『どこ行きやがった・・・』

コラア！さっさと出てこい！』

どうやら、物陰に隠れた俺を見つけ出せないようだな、しめしめ  
こう言うときにラプターちゃんのステルス能力は便利だな

そっと、物陰から状況を伺う

ヴァレリオとステラは共に向こうで熱いランデブーの真っ最中だ、  
邪魔しちや俺が巻き添えを喰う

あっちはあっちで勝手にやらせるとして、俺はこの少女を叩きのめ  
すぜ！そこ！大人げないとか言うな

「（そーつとだ、そーつと、そーつと、突撃砲を構えて・・・今だ）

ほれほれ、こっちだ駄犬少女！」

『なに！？いつの間につ！くそお！』

「Good night！」

あとはこのトリガーを引くだけ拭くだけ俺の勝利は確定だ

ダン！べしゃ

『あ』

「あん？」

『Aチーム、リーダー機撃墜、状況終了』

「・・・ええ、何それ」

背後を見ると、敵チームのステラが銃を構えていた・・・つまり、

狙撃である

「納得できねえよ．．．ちくしょうめ」

やってくれたな、あのボインちゃんめ

よく見ると、何故かもうヴァレリオ落ちてるし

戦闘中周りが見えなくなるのは俺の悪いクセだったな．．．反省反省

『あちゃー、やられちゃいましたか大尉』

「男性チームの完全敗北だ、女の壁は高えな」

しかも、たった1人にやられるって．．．俺多分部屋に一週間ぐら

いひきこもりたい気分だわ

『．．．取り敢ず』

「．．．戻るか」

とぼとぼ歩く戦術機の哀愁漂う背中はずっと絵になってるはず．．．

．誰が得すんだよ

．．．．．しばらくお待ち下さい．．．．．

制服に着替えて先程の部屋に戻ると．．．

「ははっ！何がBloody Eaterだよ、たいしたことねえじゃん！」

「全くピーピーうるさい幼女だなー、目の前にいるのは人生の先輩だよ？」

もつと大切に敬いなさい．．．って言うか、お前俺にダメージすら与えられずに終わったじゃん」

「う．．．その前にずっと逃げてたじゃねえか！」

「あれは逃げてねえ！戦法だ！」

「名付けてチキン戦法ってか！？」

「チキンって言うな！」

「じゃあ、何て言うんだよ」

「．．．引き撃ちっていうんだよ」

「撃ってねえじゃん、ずっと逃げ続けてたじゃん」

「チキンって言うな！」

「言ってねえよ！」

どうやら、この少女とは決定的に何か合わないようだ

水と油、月とすっぽんみたいだな・・・もちろん俺が月だけだな？

イブラヒムside

「やれやれ、まったく・・・」

どうやら、あの人は昔から何も変わっていないらしい

恐らく”進歩”と言う言葉を、何処かの前線に置き忘れてきてしまったようだ

やる気のない怠そうな格好、ダラダラとだらけた行動、死人のような瞳

彼こそが知る人ぞ知るBloody Eater（血を啜る者）と初めて聞けば、10人中9人は腰を抜かすだろう

既に彼を救世主扱いしている国もあるし、出鱈目な英雄譚も語り継がれている

しかし、彼はそんな大層な者ではない

寧ろ英雄とは程遠く、敢えて言うなら”生き汚い”と言えればいいだろう

彼はただ生きることに執着しながら戦い、その結果周りが助かっているだけ・・・それだけである

祖国を守るためではなく、生きるために戦っている男・・・それが神無月重だ

それに、Bloody Eaterの名は一部の人間の間では良くない意味で通っていることもある

私はその一端を垣間見たことがあるが．．．まあ、今となっては過ぎたことだ

しかし、衛士としての腕は誰もが保証できる

性格は別として、長年あらゆる国家の前線に立ってBETAと戦ってきた豊富な経験が今の彼の実績を物語っている

その点で言えば最古参の衛士の中で、彼は違う型の天才だ

重side

「ぶえつくしよい!!」

「うわ!汚ねえな!」

「グズ．．．悪い悪い」

「真後ろでクシャミすんな!」

「別にいいじゃん、細けえこと気にすんなよ」

「なんだあ?大尉、風邪か?」

「それはねえだろ、コイツ馬鹿だから」

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは、お前は自分の頭の軽さを省みてから言え」

「んだと?クラア!」

ただ今、部屋の中で4人パイプ椅子に座りながら雑談中

俺のクシャミから始まった会話は早くもヒートアップしてきている

「はあ、そもそもBloody Eaterって言うもんだからどんなスゲー奴かと思えば．．．」

「．．．」

「こんなおっさかよ．．．」  
「とう!」



ズビシ！

「何すんだコラア！」

「お兄さんだつていつてんだろ！コラア！」

「まだ言つてんの！？ムリがあるつて！」

「ほう、どこら辺が？具体的に10言ってみろ」

「まずヒゲ！その二ヒルな笑い口！年齢！つて言つか殆ど全部！」

「具体的につて言つただろうがサル女め、それではおっさん言うには程遠いなあ」

「ダメだコイツ、色んな意味で手遅れだ」

「んだと？こんちきしょう、じゃあ、お前は俺のことをどんな風に想像してたんだよ」

「そりゃあ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・ダメだ、格好良すぎてアンタと比べると可哀想」

「うるさいよ！？世の中なあ、そうそう上手くいくことなんてこれっぽっちもねえんだよ！分かったか！」

「でも、確かに私の想像とも大分違っていたわね・・・」

「！？」

「ステラもそう思うだろ？VGは？」

「まあ、ぶっちゃけ俺も」

「何がぶちゃけだよ、何だ？この戦力差は明らかに可笑しいだろ

何？イジメ？止めようぜそういうの、今時流行んねえよ

全人類協力し合っているっていう最中に、君たちみたいのがいるからいけないと俺は思っただけど

「そこんとこどうなの？ん？君たち」

「何語り出してんだよ」

「俺だつてなあ、好きで呼ばれてるワケじゃねえんだよ

何？Bloody Eater？恥ずかしいわ！ボケ！」

「自虐にしか聞こえねえから、止めるおっさん」

「おっさんじゃねえ！」

「そういうところがアタシ達の想像と違うんだよ」

「じゃあ、どうしろと！？」

「風格出せ！風格！その覇気の籠もってない瞳止める」

「歳を経る毎に元気が無くなってくんだよ」

「・・・おっさん認めたな？」

「は・・・しまったああああ！！」

くそ！幼女め、はめやがったな！？」

「今の完全な自爆だろ」

「うう、もう立ち直れねえ」

「・・・ああ、今までのイメージが崩壊していくわ」

「確かにな・・・でも、こっちの方が気楽で良いんじゃない？」

俺も最初はどんな敵つい化物かと思っただが、案外俺達みたいに普通の人間らしいな」

「そうね、どこも特別なところがない非凡ではなく、平凡

それでいて過去を自慢するわけでも、奢るわけでもない・・・

多分彼にとつてBloody Eaterとは、経験から勝手に

生まれた産物に過ぎないのかも知れない・・・」

「だからあんなに執着が無いのも頷けるな、間違つても英雄の器じゃねえけど・・・」

「ええ、戦場を誰よりも知る普通の人間・・・私たち衛士にとつての救世主かしらね」

「違いねえ、最高の上官だ」

「ふふ、そうね」

どうやら向こうは向こうで盛り上がっているようだが、生憎と俺は

そんな大層な人間じゃない

どこまでも自分の事しか考えていない汚い人間だ  
俺の辿ってきた道にはBETAの血だけじゃなく、嘗て共に戦って  
きた仲間の血も染みついている・・・

中には、助けられると分かっている見殺しにした仲間もいる・・・  
それでも俺は自分が可愛い、自分は誰よりも優先されるべき人間だ  
と思っっている自分がいる

だからな、そんな俺を信用するのは余りオススメしないぜ？  
その先に待っているのは、不幸と死だけだ・・・

「・・・い、おい！おっさん！聞いてんのかよ」

「ッ！な、なんだ」

「どうしたんだよ、そんな黙りこくって」

「な、何でもない」

「・・・？」

「スマン、ちよつと外に行ってくる・・・」

「お、おう」

少し・・・風に当たってくるか

良い気分転換になるだろう・・・多分

## しゅち

1番、2番、3番

1位、2位、3位

少尉、中佐、大将

みんな1つの命なのに、何で人間は位を付けたがるのかねえ．．．  
人間らしいと言えば人間らしいが、なんか納得できん

## 重side

「はあ．．．憂鬱だ」

どうも、人間失格、駄目男の神無月重です  
ただ今、メチャクチャブルーな気持ちです

「どうも」あの目”は慣れねえな．．．”

一種のトラウマみたいなもんだ、あの目は．．．

何十回、何百回とあの眼差しを向けられてきた

いつからだろう？ Bloody Eaterと呼ばれるようになったのは．．．多分あの頃からだろう

いつしか自分に向けられる”あの眼差し”が重圧となつてのし掛かつていた

それを向けられれば向けられるほど現実というモノを痛感した

「はあ．．．何でこんな風になつちまつたんだか」

気づけば、もう引き返せない所まで来てしまった

戦場を経る毎に、Bloody Eaterの名が知れ渡る毎に、

俺は自分が汚い人間だと思い知らされた

人々の声援がこれ以上ないほどの罵倒や侮蔑に聞こえてくる

それが嫌で嫌で．．．俺はいつも逃げた

逃げて、逃げて、逃げ出して．．．前線に留まってはまた逃げて、その繰り返し

いつの間にか、自分という人間が他人に知れ渡るのですら恐ろしく感じていた

だからずっと逃げていた．．．

ま、その果てに祖国に戻るとは．．．これも何かの因果かねえ

「どうせなら、コロつと死にたかったものだが．．．」

しかし、その機会は多々あれど考えているのと実行してみるとではまるで違う

別に死ぬのは恐くない．．．恐いけど

俺はそれ以上に死ぬ前に来る”痛み”が恐いんだな

これが溜まらなく恐ろしい

どうせなら平和の元、自分の惚れた女の膝の上で死にたいもんだ

だが、衛士という鎖で繋がれている以上、無理な高望みだ

これぞ正しく高嶺の花．．．ってね

．．．いやに今日は冴えるじゃねえか、俺

いつもの思考が不気味なくらい取り戻せねえ

「まったくどうするかなあ」

気がつけばワケわかんねえ所まで来ちゃってるし．．．何処だよ此処

「はあ、ホントにどうすっかなあ．．．」

何で巖谷の野郎はこんな所に送りつけたんだか

そもそも、何の為に俺はここにいんだ？

結構楽かと思っただが．．．どうやら簡単な仕事じゃないな

「はあ．．．本当に憂鬱だ」

空はもう夕暮れだ、時間って言うのは人の事情を知らないでサクサク進んでいく

憎たらしいいたらありやしない

人間の最大の敵は時間だと思っよ、俺は

「．．．戻るか、いつまでもこんなじゃ、あいつらにも悪い」

歩みを反転させ、基地方面へ向かおうとする．．．すると、あるモ

ノが目に入った

「あん？」

「！」

それは……

「（幼女……だと？）」

まただよ、また幼女だよ

銀色の髪をした、つるぺったん社に似た幼女だよ

なに？また俺ブ厚い本の角で殴られなきゃいかんの？

……これもう呪われてんじゃねえの？

「……」

「……」

じっと見られている俺

何なの？この子、残念ながら俺ロリコンじゃないからね

これだけはハッキリ言っとくよ？俺はロリコンじゃないからね？

その趣味の連中は狂喜乱舞しそうだけどなあ、生憎と俺はそんな恐ろしい奴等とは違うぜ

まあ、将来が楽しみではあるが……俺、ロリコンじゃないからね？ホントだよ？

勘違いしないでね？俺本当にロリコンじゃないからね？

ここテスト出るよ、しっかりメモするなり、蛍光ペンで線引つ張るなり各自の覚えやすい方法で記憶しなさい……”神無月重、39歳、断じてロリコンではない！”

よし、良かったなあ、これが正解すれば赤点は免れるぞー

解答ミスった奴は後で職員室来なさい

先生が特別指導してあげるから、覚悟しておくよーに

???side

なんだろう?このひとは・・・ふつうじゃない

”こころ”はきずだらけなのに、へいきなかおをしてる

”こころ”がちだらけなのに、ずっとあるきつづけてる

”こころ”がよいのに、たたかいつづけてる

もういつこわれてもおかしくない”こころ”でさらにきずついでる  
いたくないのかな?

かなしくないのかな?

さびしくないのかな?

「・・・」

「・・・えつと、何?何か用?」

「・・・いたくない?」

「あ?」

「いたくないの?」

「痛えよ、主にお嬢ちゃんの視線がな」

「そうじゃなくて・・・こころ」

「心お?ワケ分かんないこと言っでないで、お家帰りなさい

ほら、この黒糖飴やるから」

「・・・」

「あの、まだなんかあんの?

お兄さん見せ物じゃねえけど・・・」

「どうして、へいきなの?」

「・・・だから何が」

「こころ」

「あんまりからかっていると、お兄さん怒るぞー」

「あなたのこころはきずだらけ・・・いたくないの?」

「傷?つば付けて直すから心配ねーよ」

「そこはかとなくばかにしてるね」

「・・・はあ、良いかあ?お嬢ちゃんよ

耳の穴かっぽじってよく聞け」

「？」

「時と場合によっちゃあ、例えどんなに傷ついてもどうしようもないことがある

そんな時に一々”痛い”だの”助けてー”だの叫んだとして、結局は無駄な足掻きつてヤツだ

そんな事に労力を費やすより、腕がもげよーが、足が千切れよーが、歯あ食い縛って自分で何とかするしかないのさ」

「こわくないの？」

「気合いで何とかなる」

「さびしくないの？」

「・・・寂しいっちゃ寂しいが、俺は色々裏切ってきた男だからな独りは慣れてる」

「・・・」

「ちよつと、小難しかったか・・・

まっ、世の中ウマイ事はっかりじゃないってことさ

お嬢ちゃんも大きくなりや分かるよ」

「なんでわらっていられるの？」

「こんなご時世だ、メソメソ泣いてちゃみつともねえだろうが」

「みつともねえ？」

「そーそ、”みつともねえ”だわかったか？」

「うん、わかった」

「よーし、じゃお子様は帰る時間だ

その黒糖飴持って帰りなさい」

「・・・」

「ま、まだ何か？」

「なまえ・・・？」

「あ？」

「なまえ、なんていうの？」

「人に名前聞くときは自分から名乗れよ、ばーか」

「むゝ、ばかじゃないもん！」



「あ、スマンスマン、つい何時もの調子で喋っちまった  
で？名前なんだっけ？ああ、エリザベス？良い名前だね」

「ぜんぜんちがうよ！？まだなまえいつてないよ！？」

「えゝ面倒臭いからそれで良いじゃん、エリザベス良いじゃん、立  
派じゃんエリザベス」

「なんでそこまでエリザベスにこだわるの！？」

「しょうがないなあ、聞いてやつから言ってみ？ん？アルティシア」  
「つつこみつつかれるね・・・」

「甘いわ！お前はまだつつこみの鱗片すら触れていないぞ！」

「・・・ねえ、ほんだいにもどろろよ」

「おっと、そうだったな、ミステリア」

「ボケのほうわじょうたいっていちばんくるしいとおもっの」  
「言うじゃねえか、こん畜生」

「・・・イーニア」

「あ？」

「わたしのなまえ・・・イーニア・シエスチナ」

「ふーん、イーニャねえ」

「イーニア」

「細けえこたあ気にすんな、高々一文字違っただけだろ？」

「けっこうだいじなところだよ？」

「はは、冗談冗談」

「よろしくな、イーニア」

「・・・うん！」

「んじゃ、俺の名前だったな」

「俺の名前は神無月しげ」  
「イーニア！」  
「あ？」

「クリスカ・・・」

重side

出鼻挫かれたよ

結構恥ずかしいよ

どうしてくれんの？コレ、高くつくよ？ん？コレ

「クリスカ．．．」

「．．．誰？」

「貴様．．．イーニアから離れる！」

ジャキ！

「ええ」

あの手に持つてる黒光りする物体は何ですか？

俺の予想が正しければ、”拳銃”という武器ですな

ハンドガン、ピストル、チャカ．．．付ける名は多々あれど、本来の目的は生き物を殺す道具である

それを向けられていると言うことは．．．

「（え？なに？まさかの絶体絶命？）」

何だよ、この状況

何で幼女が絡むと流血沙汰になんだよ

絶対におかしいだろ．．．

「勘弁してくれよ、まったく」

俺は反射的に両手を挙げ、頭の後ろに付けてイーニアから離れる

女に拳銃向けられてこんな体勢になるなんて、アイツの時以来だな・

・まあ、あの女は発砲してきたが

「クリスカ！ちがうの！」

「イーニア、こっちに来なさい」

「クリスカ！やめて！」

おお、頑張れイーニア

俺の命運はお前が握ってるぞ

失敗したら末代まで呪う

さあ！俺の運命や如何に！？

「（取り敢ず、タバコ吸おう）」

イーニアとクリスカなる人物が話し合っている隙に、ポケットに手を忍ばせる

「（おお、あつたあつた）」

その箱から一本取り出し、口にくわえてライターを取り出す

・・何か普通に出来たな、こりゃいけんじゃね？

シュボ！・ダン！

「・・・」

「貴様！動くな！」

撃ったよ、撃ってきたよ、ライターが粉々に砕け散ったよ

どうすんだよ、これ．．．意外と高かったんだぞ、コレ！？」

「まあまあ、もちつけ．．．落ち着けよ、こん畜生噛んだじゃねえかよ、どうしてくれんだよ、恥ずかしいじゃねえかよ、この野郎」

「ふざけてるのか？」

「そっちこそふざけんなよ、人の名前遮った拳げ句になんちゆう物突き付けてんだ？コラ」

「どうやら、自分の立場を理解していないようだな」

「はっ！今更そんなもん向けられてビビるか

こちとらなあ、その何百倍デカイ銃を生身で突き付けられたこともあんだ

それに比べりゃ、可愛いオモチャだね」

「ほう？では何の問題も無いだろう？」

ありすぎだよ馬鹿野郎

そう言いかけて、瞬時に飲み込む

生身で喰らったら命に関わる代物である以上、拳銃も戦術機の突撃砲も変わらない

「で、どうすんの？」

大体そっちの意図が読めないんだけど？」

「イーニア、良い子だからこっちに来て」

「．．．」

なるほど

この子を捜してきたのか？

ご苦労なこったな、まっ、原因が分かれば解決は難しくない

「イーニア．．．お別れの時間だ」

「ッー！！」

「あのお姉ちゃんの言うことちゃんと聞けよ、じゃなきゃ、俺の命が危ねえ」

「．．．うん」

「よし、良い子だ」

イーニア銃を向けている彼女の元に歩き出す

「あ」

「なんだ」

「なまえ」

「はあ、重だ、しつかり覚えとけ」

「うん、じゃあね、シゲル」

「．．．ああ、またな」

そして、2人はそのまま向こうへ行ってしまった  
取り残されたのは、当然俺1人

「はあ．．．疲れた」

どうやら、前途多難は俺の人生に憑きものらしい

「（先が思いやられるぜ、まったく）」

そう思いながら、基地へと足を進めた

## はぐち

”極めるな、常に進化しろ”

これが最強への最短の道のりさ

## 重side

どーも、何？いい加減その挨拶は聞き飽きただあ？

ハイハイ、どうもスイマセンね

これしか思いつかねえんだよ、こんチクショウ

昨日のシリアスモードから一転、いつも通りの重お兄さんですよ  
ただ今シャワールームへ向かっています

この身に溜まった色々と汚いものを洗い流すため、タオル片手に廊下を進軍中

「・・・」

さて、更衣室に突入・・・ミッション開始だ！

「ん？」

しかし、いざ服を脱ごうとすると、あるものが目に入った

「・・・なーにやってんだ？お前」

「・・・あゝあゝ、大尉ですか」

男の神聖な領域をタオル一枚という、RPGの初期装備よろしくの紙装甲で覆い、雑巾のように成りはてた物体・・・

ヴァレリオ・ジアコーザが捨てられていた

「ほら、この黒糖飴やるから、これ舐めて元気出せ、な？」

「なんすか？その地味な気遣い」

「失礼なヤツだなー、気遣いがあるだけありがたいと思え

男の全裸なんぞ晒して誰が得するんだ？

目の保護にもなんねーぞ、本当はスルーしたいんだぞ、どうすんだよ、今更絡んだことに後悔してきたぞコノヤロー」

「そ、そこまで言わなくても・・・」

「で、なんかあったの？」

「・・・いや、女の壁の高さを改めて実感したところです  
今更かよ・・・で、サイズは幾つあった？」

あ、タリサは聞かなくていいや、幼女なんぞ興味ねえ」

「・・・（あとで言つとこう）」

「で？どーなんだよ」

「あれは・・・」

「・・・」

「・・・核兵器だ！！！！」

「なん・・・だと・・・」

俺も拝みたかったあああ！！！！」

「ふ、あれを見逃したとあらば、男にあらず・・・ですぜ、大尉」

「くそおおー！！！！」

「はっはっはっ！」

「この俺神無月重、三十余年生きてきたが・・・あれ程立派なモンは見たことねーんだよお！」

「でしょでしょ・・・それでねえ「2人とも？」」

「「ん？」」

「何の話をしてるのかしら？」

「ほ、ほら、あれだよあれ・・・な？」

「（ええ・・・俺に振るんですか？）あ、あれですよねえ」

「あれとは？」

「（どーすんだよ！なんか怒ってるぞ、なんか指ボキボキ鳴らし始めたぞっ！）」

「（元はと言えば大尉が・・・）」

「（あ？そうやって俺のせいにすんのかっ！？核兵器とか言ったの

はお前だろうがっ!?)」

「(さっきまで拝みたかったと言ってたの誰!?)」

「大尉」

「(ゲ!?俺かよ!) な、なんでしゅか?」

「(噛んじまったよ、大尉緊張のあまり噛んじまったよ)」

「かなり盛り上がっていたようですが．．．どのようなお話だったか教えて下さる?

核兵器とか、立派なモンとか聞こえたのですが?何が立派なのですか?」

「そ、そんなこと言ってねえよ．．．幻聴だよ、きつと、疲れてるんだよ、きつと、シャワールームの妖精だよ、絶対」

「へえ、シャワールームの妖精ねえ．．．」

「そうだよ、此処出るらしいよ?そういうの」

「じゃ、今度出たらきつちりと”退治”しないとイケないわね、そんな悪い妖精さんは．．．」

「そ、そうだね．．．はは、ははは」

「クスクス．．．それで、大尉は次の任務知っていますか?」

「あ?次の任務?」

「その様子だと、聞いていなかったようね．．．」

「馬鹿にすんなよ、ほら、あれだろ?

戦術機でオリーブの旗掲げて西と東が仲良く飛ぶんだろ?」

「(タリサと思考回路がまるで一緒ね)．．．そんな感じで大体合ってるわ」

「(合ってねえよ、重要な部分が最後尾にしかねえよ)」

「で、俺はほら、楽しい楽しい撮影会の仲間入りだろ?

余裕だね、余裕」

「．．．(大丈夫かしら)」

「ほらほら、これから身を清めるんだから、あっち行きなさい最初に言っただでしょ?俺ってシャイなの」

「そうね、失礼したわ



「じゃ、また後でね」

「はいはい、ヨロシクね」

女神のような笑みを最後に更衣室から出て行くステラ

まったく、女ってヤツは、裏で何考えてるかわからんから恐いわん

だよなあ・・・

「さて、俺は一流ししようかね」

「えつくしよい！」

「お前は風邪引かないうちに服着ろよ」

「了」解

さあ、いざ突入！

・・・俺の背中の相棒達も喜んでくれるかねえ

・・・しばらくお待ち下さい・・・

・・・ふう、気持ちよかった

何見てんだよ、さつきも言っただろうが

男の裸なんぞ誰が得すんだよ、誰も得しねえよ、一部の人間以外はな

さて、サッパリした事だし、件の任務の挨拶に行きますか・・・

・・・しばらくお待ち下さい・・・

「初めまして、お目に掛かれて光栄ですよ」

「・・・どうも？」

誰だ？こいつ・・・

「あなたの噂は耳にしています」

「はあ・・・」

「フッフッフ、Bloody Eaterの名は遠く本国まで・・・  
「マッハパンチ！」」

メゴス！！

顔面にクリーンヒット！

すげえ、綺麗に決まったよ

「ゴフツ！な、何をする！？」

「ああ、ごめんごめん、手が滑った」

「嘔吐けえええ！！今明らかに”マッハパンチ”とか言っただろうが！？」

「ままま、落ちつこうぜ、ほら、黒糖飴やるから」

「いらねえよ！！子供か！」

「だからごめんって言ってんじゃない、誰にでも間違いはあるって」

「だから今のはワザとだろ！？」

「そんな酷いこと俺がやると思ってるの？そりゃ、差別だぜ、偏見だぜ、そんなんじゃない人間の片隅にも置けねえよ」

「じゃ、マッハパンチって何？メゴスって何？何で鼻血出てるの！？」

「そんな事俺が知るかよ、アレだよ、”マンハッタンチンパンジー”って言おうとしたんだよ」

「何だそれ！？無理あるだろ！」

「ガタガタうるせえヤツだなあ・・・さっさと今回の任務の説明しろよ、5分押してるよ5分」

「最低だよ、最低な男だよこの人、自分のやったこと無かった事にする気だ」

「わかったわかった悪かったって、気をつけるよ、気が向いたら」  
「．．．ゴホン、では、今回の任務の説明をします

今回は広報任務として、西側から一機、東側から一機、合計二機でアラスカ上空を飛行します

言い換えるなら団結の証、BETAに屈せず、互いが協力し合うという重要な意味を孕んでいます」

「しつもん」

「．．．何ですか？」

「俺は何をすればいいわけ？」

「あなたには、広報任務の護衛．．．即ち、映像を取っている間、もし、有事の事があれば、それを鎮圧して貰います」

「へえ．．．ある意味、二つの大国の友好を象徴する任務なのに、随分物騒だな．．．まるで」

「．．．」

「初から何かが起きることが前提されてるみたいだ．．．」

「．．．それは、私の知ることはありません」

「ふーん」

「他に質問は？」

「．．．」

「では、もうすぐ二機が合流します  
持ち場について下さい」

さーて、臭くなってきたぞ  
何が起こるのかねえ．．．

その頃、別の場所で．．．

パン！と言う甲高い音が鳴り響く

「何すんだコラァ！！」

「私たちは任務遂行のためにここに来ている

貴様らにはこのような馴れ合いも含まれているのか？」

「何だとう．．．!?」

「我々が此処にいる理由をはき違えないことだ

二度と私たちに近寄るな」

不穏な波紋は次第に広がっていくのであった

再び戻って広報任務撮影組

既に、重は自らの愛機に搭乗している．．．

いや、彼にとって愛機では無いのかも知れない

彼は様々な戦術機を乗りこなしてきた

戦場が変わる度に、雇われる国が変わる度に、自分の半身たる戦術機を変えざるを得なかったのだ

第1世代から第3世代まで．．．大凡この男が乗っていない戦術機など無いのだろうか？

今はN22YFに収まっているが、今後はどうなるか分からない彼にとって見れば、この戦術機は傷つけると後で何言われるか分かったものではないため、早々乗り換えたいというのが本心である

「しかし、平和だね」

平行して飛ぶ二機を見ながら呟く

前では一生懸命かどうかは知らないが、二機を撮影している戦術機の後をオートパイロットに任せて自分はコックピットで寛いでいる

．．．かと思いきや、いきなり目を瞑り、睡眠を取り始めた

完全に他人事、やる気の欠片もない行動は、彼が軍人であることが根本的に間違っていることを感じさせられる

だが、彼は知らないだろう

これから起きるであろう物事を．．．

彼の言うところの厄介事が不意に牙をむいた

「．．．」

「大尉！！」

「おわっ！びびった．．．何？何か用？」

「何か用？じゃ無いですよ！緊急事態です！」

「何かあったの？」

「あなたという人は．．．良いですか？状況を説明しますよ  
アクティブ・イーグル

ACTVがチエルミナートルをロックしました」

「（あんのクソチビ何やってんの？馬鹿だろアイツ馬鹿だろ）．．．  
で、それだけ？」

「その後ですよ、そこからACTVとチエルミナートルはコースを  
大幅にずれて高機動空中戦闘を展開しています」

「ほっとけよ、気の済むまでやらせとけ」

「何を馬鹿なことを！！死人が出てからでは遅いんですよ！！それを  
防ぐためにあなたがいるんです！」

「はあ、俺の任務は撮影係のお守り、そんな事一言も聞いてねえよ」  
「有事の際には．．．と申したはずですよ！聞いていなかったのはあ  
なたでしょう！？」

「CPから指示出せば良いじゃん」

「それで収まっているならとづくに終わっています！」

「はいはい、で？俺に何して欲しいわけ？」

「二機に戦闘を中止させるように呼びかけてください」

「それだけ？それで止まるとは思えないなあ．．．」

「とにかくやるだけやって下さい、追って指示は此方から出します」

「（何を偉そうに、言うだけは気楽で良いな）了解、二機の現在位  
置を送って」

「了解、座標を送ります」

彼は直ぐさまオートパイロットを解除

ステータスチェックを行い、N22YFを戦闘モードに移行させる  
その数秒後に、二機の座標データが送られてきた

「おいおい、随分と派手にやってるなあ」

と呟きつつも、ブースト全開

「（まっ、言うだけ言っただけでバックれるか）」

面倒臭いの大嫌い、楽しんで生きたい

無気力怠慢駄目人間が戦闘に介入・・・

さて、誰が予想できようか？

彼が戦う姿を・・・

” Bloody Eater（血を啜る者） ” の本当の意味を・・・

きゅー

耐える、歯を食いしばれ．．．  
生き残れ、何をしてでも．．．  
他に感傷を移すな、失っても良いように．．．  
最低で屑みたいな矜持だが、案外気楽なもんだ  
オススメはしないがね．．．

重side

”馬鹿は死ななきゃ治らない．．．”という言葉があるように、あのお馬鹿さんも一遍死の恐怖とやらを味わえば、少しはマシになるのだろうか？

「そのの戦術機2機、聞こえてつか？」

『うるせえ！首突っ込むな！』

「お前ら一体時速km/mで鬼ごっこやってんだよ

幼少の気持ちを忘れないのは結構だが、お前既に幼女だからね？  
そろそろ大人の階段上ろうぜ？勇氣ある一歩踏み出せよ」

『どこをどう見たら鬼ごっこになるんだよ！お前バカだろ！見て分かんねえのか？バアカ！』

「分かんねえよ、お前がバカっつーこと以外はな」

『んだとコラ！お前後でぶっ飛ばす！』

「CPさんよお、聞こえてる？」

駄目だ、説得に失敗したわ、あれ程サルが人間の言葉を理解するのは無理って言っただろう

と、言うわけで今から帰投するわ」

『何言つてんですか！あなたは！もう少し粘ってくださいよ！』

「えー無理だぜこりや、だってサルだもん」

『なんだと、この腐敗人間！！』

『あなたは真面目にやっているんですか！！？』

「うるせー！！！！」

元を正せば、サル女！テメエが面倒起こさなきゃ平和に終つてたんだよ！

何馬鹿な事してくれちゃってんの？何でそんなに平和を嫌うの！？戦いたいなら単身ハイヴに突っ込んでこいや！！」

『んだと！？アホクソエロオヤジに言われたくないわ！！』

「今の一言でお兄さん怒ったぞ、後でどうなつてもしらねえぞ、謝んなら今のうちだぞ？」

『誰が謝るか、バーカ！』

『いいかげんにしろおー！！！！』

「ほら見る、広報監察官の人怒ったじゃねえか．．．って、通信切りやがったし、あのサルめ」

『ホントに真面目にやって下さいよ！？あなた本当にBloody Eaterなんですか！？』

「おいおい、言いがかりは止せ

大体風評つてのはなあ、でけえ尾ひれが付きがちなんだよ

言つとくけど、俺そこまで立派な人間じゃないからね、その恥ずかしい名前も全部周りが勝手に付けたものだからね」

『．．．』

「だから、人間出来ないものは出来ないの．．．と、言うわけですから帰投します」

『待ちたまえ』

「ん？まだなんかあんの？（．．．なーんか聞いたことあるような声だな）」

『全く、君は相変わらずだね』

「．．．まさか」



『久しぶりだね、アーモンド君、いや、それは偽名だったな．．．  
そうだろう、神無月重君？』

「ハルトウィイイックー！」

『．．．私の名前をその大声で呼ぶのは止めると言った筈だが？』  
「気にすんな、ノリだってノリ．．．って、何で此処にいの？」

『それは私がこの計画の最高責任者だからだよ』

「ふーん、で、最高責任者が一兵士に何か用？嫌な予感しかしねえ  
んだけど」

『重君、どんな手を使っても良い、あの2人を止めたまえ．．．こ  
れは命令だ』

「は？だから無理って言ってるじゃん」

『出来る出来ないではない、命令だと言った筈だ  
それに、攻撃を許可するとまで言っただぞ？』

「ずるいぞ！？職権乱用だ！鬼だ！悪魔だ！」

『良いから早くしたまえ』

「．．．クソが、後で覚えてろよ」

『フッフッフ．．．楽しみにしているよ』

そこで通信が切れる

「．．．（とは言っただものの）」

どうしろって言うの？

もう大分遠くまで飛んで行っちゃったけど．．．

それにしても、まさかハルトウィックまでいるとはな．．．ビック  
リしたわ、昔を思い出すぜ

「．．．！」

おっとと．．．思考に耽る前に、あの二機を追いかけろか

その頃、別の部屋で・・・

「やれやれ、全く・・・フツ、あの男はいつまでたっても変わらんな」

「・・・大佐は神無月大尉とお知り合いで？」

「まあな、あの男には色々世話になったものだ・・・世話してもやったがな」

「・・・あの」

「何かね？」

「大佐は、彼を見てどう思いますか？」

「ふむ、質問の真意が分からんな」

「そ、そうですか・・・何でもありません、忘れてください」

「・・・」

「・・・」

「そうだな、敢えて言うなら・・・」

「・・・！」

「共に戦ってきた”戦友”だ、これだけはハッキリ言える」

「そう・・・ですか」

「何か含むところがあるのかね？」

「いえ、特にありません」

「ふむ、そうか（そう言えば、重君が何故日本ではなく各地を転々としていたか分からんな・・・まあ、あの男のことだ、余り深い意味は無いと思うが・・・）」

「・・・（何故、彼は国外逃亡を？叔父様はただ単に死ぬのが恐いからと言っていたけど、何故態々国を出てまで恐がっている戦場に出ているのか分からない）

そして、どうして・・・恨まれると、憎まれると分かっている国

に戻ってきたのか．．分らない、下手をすれば殺されてしまう  
と言うのに．．．」

色んなところで彼に対する思考が入り乱れる

彼の行動は捉え方によって無意味にも意味深にもとられることが多  
々ある、非常に厄介な質なのだ

しかし、彼の行動原理とは単純に考えれば納得してしまうほど簡単  
なのだ

恐いから逃げる．．

しかし後になって逃げた事に後悔し、その苦悩に抗うために戦う．

．  
そして恐くなってからまた逃げて．．また後悔しては戦う．．  
時たま故郷が恋しくなつて、碌なことにならないと分かつていなが  
らも、生まれた場所に帰る．．

彼が、そんな臆病でどうしようもない性格であると理解できる人間  
ならば、容易に納得いつてしまうのだが．．世の中それ程甘くは  
無いのである

チキンでヘタレな彼にはキツイご時世であつた

高速で三次元戦闘を繰り広げる二機

そして、その後を追うように一機の戦術機が接近していた  
重side

「その二機止まれ、止まらなと撃つぞ」

駄目だ、一向に止まる様子がねえ．．  
どうするかな

攻撃許可まで下りてるしな

やらないと、何されるか分かったもんじゃねえ．．

「サル女、聞こえてたら返事くれ」

「ッ！またお前かよ！すっこんでろ！」

「そうしたいのは山々なんだけどねえ．．生憎一番偉いおっさんからお前らの戦闘を止めさせるとか言われてるのよ」

「知るか！そんなもん！」

「そんなもんだから、こつちとしても不本意なんだけど．．攻撃許可まで下りてるからにはやるしかないんだよねえ」

「ッ！お前．．！」

「双方に警告する、5つ数える間に戦闘を停止しろ、さもなければ発砲する

これは脅しじゃない、正式に許可が下りている

それじゃ、言ってみよう

いゝち．．ん？」

何だ？チエルミナートルが急に停止したぞ？

そつかそつか、この俺の勇士に恐れおののいたか

何だよ、案外話分かる．．

「．．って、何で今度は俺がロックオンされてんだ！！」

何だよ！？こいつ、急に反転したかと思えば突撃砲構えながらこつち来たぞ、オイ

やっべ、これに傷つけたら怒られる．．そんでもって、エスケープ！

「ノオオオオオオオオ！！ふざけんなあああああ！！！」

オイイ！！あの鬼さんは混紡の代わりに突撃砲握ってるぞ！どういう事だこの野郎！？

「待て待て待てちよつと待てえ！！」

「．．」

「聞いている？ちよつと聞いている？無視すんなよオイ！」

「．．」

「くそう、かくなる上は・・・ハルトウィック！」

『何かね？』

「向こうに停止呼びかけて！それぐらい良いだろ？」

『ふむ、向こうのCPと繋げてみる、暫し待て・・・』

「オイ！早くしてよね、犬じゃねえんだ、待てはもう良いよ、何ならあれか？お手とか、おかわりとか、おちんちんとかすれば何とかなるのか？」

『それもそれで面白そうだ、良いだろう、やってみたまえ』

「何でそうなるの！？馬鹿だろ、お前馬鹿だろ」

『何を言うか、その芸を見せればあっちも納得するかも知れん一つの策だぞ？やってみる価値は大いにある』

「誰か！誰かこの馬鹿の頭を引っぱたいて！そしてさっさとドイツに返してあげて！こいつに最高責任者は無理だつて！！」

『フム、丁度向こうと繋がったぞ、どうするかね』

「どうするかね・・・じゃねえよ、さっさと停止を呼びかける」

『では、君が直接言ってみたらどうだね、今から繋げるぞ』

「オイ！人の話聞いてたか？停止を呼びかけろって言うてんのに何でそうなるの？やっぱり馬鹿だろ！？」

『よし、繋がったぞ・・・頑張りたまえ』

「あ！？切るな！・・・くそう、あー聞こえますか？」

『聞こえている』

「お宅のやんちゃん子の暴走を止めてくれませんか？凄い迷惑なんですけど、近所迷惑どこじゃないんですけど」

『すまないが此方でも応答を呼びかけているが、未だ返答がない』

「真剣にやってねえからだよ、ちゃんとやれよ、さっさと止めるよ、何のためにお前らいるんだよ」

『お言葉ですが、元はと言えばそちらが我が国の戦術機に対して敵対行動をとったからであつて・・・』

「今此処にいない人間の事掘り返してどうすんの？お前はガキか？そんなねちっこい事言ってる暇があったらさっさと止めるよ」

『．．．何だと？』

「おーおー、随分と沸点が低いねえお宅．．．将来ハゲるぞー」

『私を侮辱するのですか？』

「．．．お前、名前なんて言うの？」

『これは失礼．．．イエージ・サンダークと申します、以後お見知りおきを』

「ふーん．．．じゃ、サンダークさんよアンタじゃ話にならないわ」

『まだ言うのですか．．．「ロゴフスキーのおっさんを出せ」．．．ッ！？』

「いるんだろ？絶対あのおっさんこういう大きな計画に関わってる筈．．．多分」

『（何故同志ロゴフスキーの事を知っている！？どういう関係だ．．．！）．．．何のことですか？』

「チ．．．まあいいや、邪魔したな」

『．．．』

とうとう自分で何とかするしかなかったぞ、こりや．．．災難だな

『重君、今し方入った情報だ』

「今更なんだ、役立たず」

『酷い言われ様だね、そうそう、それは置いて．．．現在、その空域に大型輸送機が飛行中だ』

そのままのコースでは衝突する．．．回避せよ』

「お前は鬼か！？ああん！？」

『尚、輸送機に何かあつたら君に責任を取って貰おう、そのつもりで．．．』

「は？」

『では、健闘を祈る』

「ちょ待て．．．切りやがった」

どうすんだよ、これ、とうとう引き下がれなくなったぞ？

向こうは未だ俺の後ろをストーカーの如くねちねち着いてきてるし、今度は目の前に輸送機とは．．．

「ふざけんな！！やってやるよ畜生！！」  
バッチ来いや！伊達に修羅場を潜ってねえんだよ！

??? side

その頃、件の輸送機内部では2人の若い男性が搭乗していた

「ユウヤ、おまえさあ．．．いいかげん機嫌なおせって」

「．．．」

「ガキじゃねえんだからさあ．．．ここでフテ腐れたって、しょうがねえだろうよ」

片方の男性がもう片方の男性を窘めるが、そのもう片方の男性．．．  
ユウヤはめんどくさそうに片眼を開き、睨み付ける

「ガキはどっちだよバアカ

こんな最果てに飛ばされたって言うのにはしやぎやがって」

「なあユウヤよう、ユーコン基地っていったら世界中のエリート衛士が集められている作戦試験部隊の本拠地だろ？」

しかもオレ達の配属先は日本メーカーとの共同開発チームっていうじゃねえか」

「．．．」

「そんなビックプロジェクトのテストパイロットに上層部直々に指名されたんだ、ある意味栄転だぜ？」

何がそんなに気にいらねえんだよ」

「．．．何でオレなんだ？」

「あ？」

「よりによって”日本”がらみのプロジェクトに．．．どうしてオ

レが．．．」

「またそれかよ．．．相変わらず日本のことになると熱くなるのな」

「別に．．．熱くなんかなくてねえよ」

「なんでそこまで日本を毛嫌いすんだよ」

お前にだって半分日本人の血が流れて．．．「オレは．．．」

そのとき、ゴッ！という音と共に機体が揺さぶられる

「何だよ．．．」

再アプローチかあ？」

「違う．．．」

これは．．．っ」

「あ、おい、どこ行くだよ！」

ユウヤが急ぎ向かった先．．．それはパイロットルームであった  
すでに操縦を担当している2人は異変に気づいていた

「後方から戦術機2機が高速で接近中！」

「このままだと衝突コースに．．．！！！」

「クソっ」

演習区画はずっと向こうのはずだぞ！？」

「何でこんな所を飛んでやがるんだ！！！」

その時、男性のものと思われる低い声で通信が入る

『オラ！そこ退け！怪我すんぞ、オタンコナス共！』

「ダメだ、高度を上げるなッ！！そのまま滑走路に突っ込め！」

その時、彼らは見た、高速戦闘を展開する二機の戦術機を

そして、あることに気づく

「ッ！？（あれは．．．ラプターだと！？）おい、ヴィンセント！」

「ああ．．．しかも、形状からしてただのラプターじゃないぞ、あ  
りゃあ．．．」

あれは、国内でも数奇程度しか生産されなかったN22YF、ラ  
プターの試作2号機．．．幻の機体だ」

「（一体、誰が乗ってやがるんだ．．．！？）」

彼らの疑問はアラスカに着いてから早々尽きないものであった



まあ、少なくともダメ人間が乗っているとは思わなかっただろう．．

重side

未だ鬼ごつこに興じている重であつたが、その顔は珍しく真剣そのものであつた

「おいおい、いい加減にしないとお兄さん怒るぞー

もう気が済んだら？さつさとお家に帰れよ」

『．．．』

「（ここでも無視か．．．呼びかけてる自分が馬鹿らしくなってきた）

ようし、分かつた．．．もう怒つたぞ」

と、一気に機体を加速させる

このラプターに積んであるエンジン．．．YF120エンジンはかなりの高出力を誇る

そんじゃそこらの戦術機とは比べ物にならないほどの速度で飛行を可能にしたモンスターマシンなのだ．．．まあ、その分ぶっ壊したらとんでもないことになるが．．．

まあ、今はそんなこと言っている暇は無いだろう

案の上、その速度に付いていこうと向こうも加速を始めた．．．そして、ここからは俺の戦いが始まる

「（チャンスは一回！これで決めなけりやお終いさね）」

今から少し特殊な機動をやる．．．のは良いのだが、色々ときついんだわコレが

- 1つ、この機動は相当な加速が出ていなければ無理
- 2つ、チャンスは一回、二回目は警戒されて通用しない
- 3つ、体に悪い

主にこの三つの理由が起因している

まあ、三つ目が一番やりたくない理由なんだよね

「（そーら．．．逝くぞー！）」

コマンドを素早く入力．．．

その信号を受けて、恐らくは、跳躍装置が不可思議な方向を向いている筈．．．

次の瞬間、視界が反転し、強力なGが肉体を襲う

骨が軋む、内臓が押しつぶされそうになる．．．それをやっとの事で堪え、反転した視界から敵の位置を捉える

「（こいつスゲーな、もう対応してやがる．．．）」

初見で対応して見せたのはコイツが初めてだぜ．．．でもなあ、対応は出来ても攻略までは無理だったようだな

そう、特殊な機動とは”宙返り”である．．．どっちかって言うとバク転みたいな？

加速をつけて、ある決まった方向にブーストを吹かすことで、空中で素早く1回転をする．．．

しかも、回っている間に敵の位置を捉え続けることが出来れば、敵の機動に合わせて背後をとることが出来る

しかし1回で決めなければ、機動を悟られるし、2回目成功したとしても通用するかはまた別問題だ

そして、最大の理由が．．．

「オ、オウエエエエエエエエエエ！！（気持ち悪！出る！出ちまうよ！）」

そう、めっさ吐きそうになることだ

まず食べ過ぎてからこの機動を披露すると120%の確立でコックピットが嘔吐という爆撃を受けた後の悲惨な現場になる

「でもこれで．．．後ろを取ったぜ」

『．．．！』

「泣き言はきかねえぞ．．．それじゃ」

突撃砲をチェルミナートルへ向ける

「Good night!」

『．．．！！』

トリガーに力を入れる．．．ふ、ジ・エンドだ！

カチン！

「．．．あれ？」

『．．．？』

何だ？弾でねえぞ？詰まっただか？

ん？そっぴや俺、大事なことを忘れていたような気がする．．．

「．．．」

『．．．』

「．．．セーフティ解除すんの忘れてたアアアア！！！」

『．．．』

何がGood nightだよ、何がジ・エンドだよ、まだ昼間だよ！まだ何も終わってねえよ！て、言うか寧ろ俺が終わるわ！畜生！！恥ずかしい！メツチャ恥ずかしい！

『貴様は．．．』

「ん．．．？」

『貴様はどこまで私たちをコケにすれば気が済むんだ．．．！！』

「いや待て待て待て、本気でミスったんだって！ゴメン、ホントに

ゴメン！だからちよつと待って！！（女・・・？）」

『泣き言は・・・聞かない！！』

やべー！今度は向こうが突撃砲構えてきたよ、バリバリ射程圏内なんですけど、ハチの巢確定だぞこれ・・・何か向こうの人メツチャ怒ってたし

『死ね！！』

「死ねって何！？マジで殺る気！？タンマ、Wait、ストップ  
！！」

『双方聞こえるか？こちらはプロミネンス計画総責任者、クラウド・ハルトウィックだ』

「何！？」

『・・・！？』

『直ちに戦闘を中止せよ、これ以上攻撃行動を継続するというなら、危険領域レベルに到達したとみなし、スクランブル発進も辞さない  
・  
・

繰り返す、直ちに戦闘を・・・』

『・・・イーダル！これより帰登します』

徐々に離れていく戦術機の後姿を見やり、俺は改めてこう思った

「・・・（助かった）」

寿命が確実に縮まったぞ・・・それにしても、あの戦術機の衛士、声からして女だったな

しかも何か聞いたことあるような声だったぞ・・・？

「これより帰還します」

いや・・・考えすぎだろう、多分

でも、何か引つかかるなあ・・・

じゅーう

ユウヤ・ブリッジス？ああ、あれだろ？主人公の器ってヤツ？

優秀でありながら止まらない進化

他に愛されるカリスマ

障害にブチ当たっても乗り越えられる度胸

羨ましいね．．．俺にもそんなのがあれば、ここまで後悔はしなか

っただろうよ

失う物も、失う者も、失うモノも、もつと少なくて済んだだろうに．

まったく、神様ってのは意地悪だ

重side

はい、どーも

元気ですか？お兄さんはこの通り元気です．．．うえぶ

．．．嘘です、ぶっちゃけて言くと360度回転での内蔵シェイクと全方向からの強力なGの波状攻撃を喰らったので、簡単には回復しないです

戦術機降りてから何度か吐きました．．．ごめんよ、掃除のおばちゃん

ただ今、アルゴスマンバーとPXで寛いでいます  
はあ、平和は良いねえ

「それにしても、大尉のあの空中一回転凄かったな」

「ヴァレリオ、思い出させないでくれ、顔面にゲロ吐くぞ」

「でも、本当に凄かったわね」

あんな機動されたら、普通回避は不可能よ」

「凄い凄い言ってるけどな、あんまり需要無いぜ？

何たって、使えるのが一回限りだしな

二回目以降になると、最初の加速で悟られるし、障害物の多い低空では使用できなくて場所も限定される

何より無理矢理な機動だ、戦術機と衛士に負担が掛かってしょうがねえ・・・うえぶ」

「だ、だいじょうぶですかい？大尉」

「もう二度とやりたくねえ・・・」

「へん！あんなチンチクリンな機動、アタシにだって出来る！」

「なーにがチンチクリンだよ、このストコドッコイ！

面倒事ばかり起こしやがって、何でお前の尻ぬぐいせにやならんのだ」

「お前が勝手に割り込んで来たんだろうが！」

「よく言うよ、このクソガキ

後ろばかり取られてた癖に」

「う・・・あそこから逆転する筈だったんだよ！！」

「あー！！苦しい苦しい！！言い訳か？負け惜しみか？見苦しいよ！ホント見苦しいよ！」

「うるせえー！！！！」

「ごあ！？何すんだコラ！？」

「地獄に落ちろあー！！」

「てめえがな！！」

「・・・それにしても、どこであんな技術を身につけたのかしら？

BETAに有効とは言い難い、謂わば対人戦闘技術よね」

鋭いところを突つくねえ・・・

ここの連中は末恐ろしいよ、まったく

「・・・まつ、色々あつたんだよ」

「お？なんだ？おっさん、シリアス気取りか？似合わねえよ、気持ちワリイよ！」

「こ、このクソガキが・・・喰らえ！天誅！！」

「喰らうか！」

「あーあー、また始まったよ・・・ん？」

「・・・」

「どうした？ステラ」

「・・・！」

いえ、何でもないわ」

「・・・？」

「（ただの思い過ごしだと良いのだけれど、もしかしたら彼は・・・）」

「この野郎！」

「甘いわ！」

互いに激しいバトルを繰り広げていると、カチャリ・・・とドアが開く

「・・・？」「・・・」

入ってきたのは、旦那と・・・誰？

「そのまま楽にして聞け」

諸君、本日付で我がアルゴス小隊に編入となったユウヤ・ブリッ  
ジス少尉だ

出生は合衆国陸軍戦技研部隊・・・何とも頼もしいエリート衛士  
だな」

「（旦那・・・アンタが言うのと皮肉にしか聞こえませんか）」

「（こいつが例の・・・フン、実戦経験もない甘ちゃんがどこまで  
使えるんだか・・・）」

「フ・・・では、我が隊のメンバーを紹介しよう

イタリア軍より派遣されているヴァレリオ・ジアコーザ少尉  
スウェーデン軍所属のステラ・ブレーメン少尉

ネパール軍のタリサ・マナンドル少尉

そして、日本帝国軍、いや、正確には国連軍所属の神無月重大尉・  
・貴様にも馴染み深いあの赤いラプターに乗っていたのは彼だ」

「（また旦那は余計なことを．．．）」

「（コイツが．．．！？しかも日本人じゃねえか！何でこんな奴が  
ラプターに乗って．．．！？）」

「最後に改めて、私はトルコ軍から派遣されているイブラヒム・ド  
ウル中尉だ

最前線へようこそ」

「（イタリア、スウェーデン、ネパール、トルコ、日本．．．B E  
T Aに祖国を蹂躪された連中の寄せ集めってことか

違う．．．オレは合衆国民だ、寄せ集めのひとりじゃない、こ  
いつらとは違う．．．！）」

「さて、自己紹介も終わったところで互いに親睦を深めるとしよう

ブリッジスの着任祝いに実機演習を行う．．．想定は”CASE・  
47”だ」

「（”CASE・47”．．．市街地における二機編隊同士の対人  
戦闘演習

通称、旦那流新人公開リンチ歓迎方法である

頑張れ、ユウヤ・ブリッジスとやら．．．

俺もその道を辿ってきた1人だ、そうやって痛めつけられて人  
間は大人へと成長するのさ）」

「それと、神無月大尉」

「やだ」

「まだ何も言っていないせんよ」

「どうせ旦那は良からぬ事を考えているんでしょうが

俺はなあ、どこぞのバカ！の起こした面倒事で体が悲鳴上げてる  
んだ、休ませてくれ」

「（こ、このクソオヤジが．．．あとで殺す！）」

「残念ですな、それは叶いそうにありませんよ



何たって、最高責任者クラウド・ハルトウィック大佐から直々の出頭命令が出ています．．．貴方に」

「あんの、クソヤローめ．．．何の嫌がらせだ？」

「そう、貴方の言うクソヤロー様からの直々のご命令です

いやはや、有名人は辛いすなあ．．．」

「あー！！そうやって、旦那は俺を虐めるんだ！

良いさ行つてやるよ、大佐がなんぼのもんじやいポケエ！！」

だん！と立ち上がり、颯爽と部屋を出ていく

くそう、上手いこと旦那に乘せられてしまった．．．敵わねよ畜生め

．．．．．しばらくお待ち下さい．．．．．

「ここか？」

何とかあの野郎のいるところまで辿り着く

そして、ドンドン！と乱暴に扉を殴る

「おおーい！来てやったぞ！茶菓子ぐらいは用意できてんだろうな？」

「入りたまえ」

「何が入りたまえだよ、どんだけ苦労したと思って．．．」

愚痴りながら扉を開けるとそこには

「はっはっは、久しぶりだね」

ハルトウィックと．．．

「どうも、宜しく願います．．．神無月大尉」

我らが鬼神、篁唯依嬢の姿があった．．．

即座に回れ右！方向転換の後は、戦域を離脱する．．．だって勝てるわけねえじゃん！！

「失礼しました、任務に戻りまーす！」

「どこに行かれるんですか？」

「う」

「まあ、座りたまえ、昔話でもじっくりと堪能しようじゃないか」

「．．．こんな事するためにわざわざ大尉クラスの俺を呼んだのか？」

「大切な客人を呼んで何が悪い？」

「腹の内でも考えてやがる」

「酷い言われ様だね」

「はあ、まったく．．．ホントに昔の話するために呼んだのかよ」

「たまには良いじゃないか」

「何がたまにはだよ．．．で、なんで唯依ちゃ．．．篁中尉がいの？」

「彼女は日本のXFJ計画の主任だ、聞いていなかったのかね」

「初耳だ．．．て言うかXFJ計画って何？」

「．．．君の適当さも相変わらずだね」

「しょうがねえだろ？ 訳も分からず飛ばされたんだから」

「まあ、その概要は彼女に教えて貰うと良い」

「へーい」

## 篁side

目の前で、ハルトウィック大佐と神無月大尉が談笑している話からして、昔の事だと察することが出来る

「（．．．しかし、だからといって上官に対してあのような言葉遣いは酷すぎる）」

後で注意しなければ．．．そう思っていたときだった

「しかし、彼女は君がいなくなって随分と寂しがっていたと聞いているが．．．？」

「（彼女？）」

「おいおい、誤解を招く言い方は止せ

大方、八つ当たりする対象がいなくなってイライラしてんだろうな」

「彼女も報われないね、彼女は彼女なりに君の抛り所になろうとしていたというのに．．．」

「だから、そんなんじゃないって

確かに付き合いは長げえけど、そう言う関係だったときは少なくとも一度もない！」

「（付き合いが長い？）」

「君が一方的にそう思っているだけだよ」

「冗談じゃねえぞ、あいつに撃たれた銃創が未だに痛いんだよ  
仮に俺とあいつが夫婦になってみる、俺なんかあつという間に喰われるぞ」

「（夫婦？）」

「それは性的な意味かね？」

「違うに決まってるんだろ！やっぱりお前バカだろ！命が危ねえって  
いう意味だ！」

「やれやれ、しかし、彼女が寂しがっていたのは事実だ

あのように、腹の内を明かし合える仲など彼女にとっても心の支えだったんだろう」

「あのようにって．．．お前西ドイツ所属だろうが、何で東ドイツ  
のあの女の事をそんなに知ってるんだよ」

「何だかんだで彼女は有名だったからね」

「それだけかよ」

「他にでもあるが、君には教えない」

「子供か、お前は」

「そう言えば、これは教えておいた方が良さだろう．．．君を血眼で追っていた連中も一部、なかなか諦め切れていないらしい」

「”亡命者狩り”．．．所謂”Escape killer”かドイツを出るとき、何度殺されそうになったものか．．．

特にあの赤目の女には参ったね、しつこいたらありやしねえ」

「流石のBloody EaterもEscape killerには恐れおののいたか？」

「馬鹿、生身でどうやって戦術機と戦えっていうんだよ」

「はっはっは、確かにそうだな

しかし、逃げ切れた君には感服するよ」

「ギリギリだったけどな」

「．．．」

「．．．」

沈黙が訪れる

すると、ハルトウィック大佐が口を開いた

「．．．もう一度」

「あ？」

「もう一度戻ってくる気は無いかね．．．」

「ドイツにか？」

「きつと彼女も喜ぶぞ」

「（ッ！！何を．．．）」

言うのですか！？という言葉に辛うじて飲み込む

上官の発言を遮るといふのは許されざる行為．．．何とか押しとど

めた私を自分で褒めても良い

それ程大佐の発言は衝撃的であつた

「その話はもう良いって」

「話は篁中尉から聞いた．．．君は国外逃亡したそうじゃないか」

「．．．ああ」

「なら、今の君は”生かされている”状況だ

使い捨ての駒として、無惨にも戦場で散っていくのは目に見えている

例えば君がどんなに理不尽だと叫んでも、”裏切り者”のレッテルを貼られた君の声を真剣に聞いてくれる人間は日本に居るのか？」

「．．．」

「篁中尉の前でこうは言いたくはないが．．．今の日本に君の居場所はあるのか？」

「．．．」

大佐の問いに答えるなら、誰もが首を横に振るだろう

一時は銃殺刑までもが決まったのだ、こうして彼が生きている状況は奇跡に近い．．．と同時にプライドと面子のため、彼の生を疎ましく思うものも多い

巖谷叔父様のような接し方を出来る人間は日本に数えるほどしか居ないだろう

殆どの者は、隙あらば彼を抹殺しそうな勢いだ

「．．．それは、ドイツも一緒じゃないのか？」

「君を連れ戻すのは上層部からも度々意見が上がっていた

何がともあれ、君が祖国のために命を張って戦ったのは事実

感謝することはあっても殺すことは無い．．．君さえ承諾すれば歓迎しよう」

「．．．」

「どうかね？」

私にはどうすることも出来ない．．．ただ彼の返事を待つばかりだ確かに日本にいては彼の苦しみは増すばかりだろう

なら、彼はきつと大佐の差し伸べた手を．．．

「何とも魅力的な誘いだが．．．すまん、その申し出には答えられない」

「（え．．．）」

「ほう．．．理由を聞いても言いかね？」

「理由なんてそんな大層なものはない、これは俺のクソみたいなプ

ライドが関わっている

物事には筋を通さなければいけない、自分で蒔いた種は自分で刈らなければならない．．．全てのはじまりは、俺が国外逃亡っていう馬鹿な真似をしちまっ<sup>ケリ</sup>たせいだ

なら、いつかそれに決着を付けなくちゃならない時が来るのも承知の上

こう言っちゃ悪いが、今ここで逃げ出したら俺は一生立ち直れないね．．．それどころか、生きていること自体に後悔することになる、それだけは．．．嫌だからな」

「．．．だが、結局その先に待っているのは、どのみち不条理な死だけだ

戦場で見捨てられ犬死にか、裏切り者の公開処刑か、はたまた人知れず暗殺か．．．君はそれで良いのかね？」

「不条理だとか、理不尽だとかはこの世に腐るほど溢れかえってる．

．．．別段俺が不幸って言う訳じゃないからな．．．

もしもそのどちらかの局面が訪れたら．．．最後まで抗ってやるさ死ぬ為に戻った訳じゃねえからな」

「（大尉．．．）」

「フツ、相変わらず愚かな男だよ．．．君は」

「よく言われる」

「まったく、私は彼女に何て言えば良いんだ？」

「俺は元気だ、お前も精々くたばらないように頑張れ」．．．とでも伝えておけ」

「駄目だ、そんな素っ気ない言葉は許さんぞ」

「．．．そうだな、俺は元気だ、今度会ったとき楽しみにしてる”で良いだろ？」

「．．．まあ、良いだろう、確かに伝えておこう」

「無理しなくて良いからな」

「はっはっは、確実に伝えておこう

”愛してるぜ、マイ・ハニー”とな」

「何か内容が180°違うし」

「では、私は会議がある．．．またの機会に会おう、友よ」

「．．．はいはい、またな、友よ」

「フツ．．．」

ハルトウィック大佐が退室する

残されたのは、私と神無月大尉のみとなった

「．．．さて、俺達も帰ろうか」

「神無月大尉．．．」

言葉が出てこない

何故、わざわざ苦しい道に行くのか．．？

あなたは臆病ではないのか．．？

どうして、平然としていられるのか．．？

聞きたいことは沢山ある．．．

しかし、それを察したかのように大尉が語る

「何も言わなくて良いさ．．．」

これは、俺なりの”けじめ”の付け方だ

今まで散々好き勝手にやって来たんだし、少しくらい苦しくたって文句は言えねえ」

「．．．その先に、大佐の言っていた”理不尽な死が”待っていたとしても．．．ですか？」

「その時はその時だ．．．だが、すぐに訪れる訳じゃないんだろ？  
だったら不確定な未来に怯えるよりも、いまできる最良の道を選んでいけばいい

もしかしたら、その果てに待っているのは”死”とは限らないかな

「そう．．．ですか」

この人は本当に臆病で出来損ないなのか．．？否、それは表面的な部分に過ぎない

もし、何かが違っていたら彼はきっと誰もが認める英雄となっていたとしてもおかしくは無かっただろう

ただ、彼は貧乏くじを引いただけ．．．それだけである

「さて、辛気臭え話はここまでにしようや

明日から、本格的に仕事が始まるんだろ？」

「あ．．．は、はい」

「じゃ、体壊すなよ」

先に扉へ向かおうとする神無月大尉．．．

その背中へは、何故か寂しく思えた

「あ、あの！大尉！」

「ん？何だ？」

「．．．た、大尉もお体に気をつけて」

フツ、と微笑む大尉

今まで見せたことのない優しい笑みだった

それを向けられて、思わずドギマギしてしまう

「大丈夫さ．．．伊達に歳月を重ねてはいないからな」

そのまま退室していく．．．

だが、その背中へはやはり寂しそうであった

重side

「ふう．．．」

軽く疲労感が残る．．．

何故ハルトウィックは唯依ちゃんのいる目の前であんな話を切り出したのだろうか？

幾ら何でも無茶苦茶だぞ．．．それに、まるで俺の答えを予め知っていたような雰囲気だった



伊達に長く付き合っていないんだ、それくらい表情を見れば分かる  
だが、あの答えに嘘偽りは無い．．．帰国するときに決心していた  
ことだ

例えその先にどんな死に様が待っているとも構わない．．．しか  
し、俺は潔くソレを受け入れるほど勇敢ではない  
故に、その状況が来たのなら全力で抗ってやるさ

天寿を全うするまで、恨まれ役でも何でもいいから生き残る．．．  
矛盾していて自分勝手に我儘なやり方だが、やっぱり死ぬのは恐いし、  
痛いのも嫌だ

「面倒臭いな．．．こう言うのはやっぱり柄じゃねえ」  
平和が一番だよ、やっぱり．．．

きっと俺は生まれる世界を間違っただな．．．うん、絶対そうだ  
子は親を選べないと言いが、生まれる環境から世の中まで選べない  
なんて酷すぎる話だ

今更ながら、整備兵とか羨ましすぎる．．．今からでも遅くはない  
かな？

「．．．いやいやいや、流石に駄目だろうそれは」

さつきあれ程格好いいこと言っというて何考えてんだ？俺は．．．

「．．．やっぱり駄目だなあ」

自覚はしていたが、ここまで酷いとなると正直自分がどれだけ駄目  
な奴か思い知らされる

自己嫌悪とか、もうそというのが可愛く思えてくる程に．．．こり  
や末期だな

「随分と絞られたようですね？」

「．．．イブラヒム」

「貴方が私の名前を呼ぶとは．．．重傷ですね」

「ほっとけ」

「．．．貴方は一見大胆に見えて繊細だ、大雑把に見えてマメなと  
ころがある」

「．．．」

「フ．．．

そこまで自分を否定する必要はどこにある？

お前の歩いてきた軌跡は誰にも否定できないように、もっと自分を誇っても良いんだぞ？」

「何を知ったような口きいてんだよ」

「私とお前は一時期長らく背中を預け合った仲だぞ、それくらい言わせる

お前は、少しチャラチャラしていた方が丁度良いというものだ」

「．．．そんなもんかねえ」

「そんな沈んでいたら、あいつらに示しが付かないぞ？」

特にタリサに至っては、気持ちワリイ．．．で一蹴されるのが目に見えている

馬鹿らしくないか？」

「．．．違いねえな」

「なら、あれこれ考えるのは後にしたらどうだ？」

お前は、口より先に手が出るタイプだろう？」

「確かに」

流石旦那、よく解つてらっしゃる

「（俺が辿ってきた軌跡．．．か）」

確かに、頭を使うのは上の連中の仕事だな

俺達衛士は、体を動かしていれば良いという者

考える時っていうと．．．敵の数とか、弾の残り数とか、光線級の攻撃とか、逃げる算段くらいか

ここで悩んでいるのは旦那の言うとおり野暮だ

「いつも通りに逝きましょうか？」

「．．．そうだな、人生前進あるのみだな」

「そうですよ、では．．．」

「元気に逝くか」

さて、俺の戦いはまだ始まったばかりだ

こんなところで蹴躓いてたまるかよ、こん畜生！！

## いれぶん

俺は最強になりたい

俺は反則<sup>チート</sup>に憧れる

俺はバケモノと呼ばれる力が欲しい

子供<sup>ガキ</sup>の頃から渴望してきた．．．

そして今でも飢えている

だが、老いが進むばかりで何も変わらないぜ．．．まったく

灼ける大地．．．

そこら中に転がる肉片．．．

真っ赤な空と太陽．．．

現実味のない、だが．．．やけに印象強い光景だ

「．．．」

俺はその死の滴る道を戦術機に乗ってただ歩き続けていた

何故か重々しい疲労感が俺の体にのし掛かっており、今にも倒れそうな機動だった

しかし、歩みは止まらない．．．俺の意思とは関係なく俺の体は動き続ける

「（どこだよ、ここ．．．）」

見渡す限りの死の山．．．BETAは勿論、戦術機等の兵器類の様々な残骸、果てには人の死骸の山までもがある

「誰かいなか」

．．．という虚しい声が辺りに響く

しかし、返答は無い

「参ったね、どうも．．．ん？」

その時、微かだが”音”が聞こえた

「（銃声．．．しかも戦術機の突撃砲の音だ）」

自然と体が動く．．．当然、戦術機もソレに答え、急加速する

「一体誰がドンパチやってんだか．．．」

そんな呟きと共に目に入った光景．．．それは

「！」

幾多のBETAの軍勢に、”たった一機で”立ち向かっている戦術機だった

いや、彼にとって重要なのはそこではなく．．．

「（あの戦術機は．．．ッ！クソ！間に合え！！）」

そう、そのたった一機で立ち向かっている戦術機．．．MiG-21PF バラライカ

彼にとつても馴染み深い戦術機、嘗て幾多の戦場を共に戦い、共に戦場を乗り越えてきた大事な戦友の駆る機体だ．．．そう、彼女の乗る戦術機だ

その傍へ駆け寄ろうと、急加速させようとした、その時であった  
「ッ！！何だ！」

ガクン！と機体が傾く

原因を探ろうと足下を見てギョツとした．．．今までただの屍の山だった者達が突如動き出し、自分の戦術機の片方の足を引っ張っているではないか

人間の死骸、戦術機の残骸、BETAの肉片がごちゃ混ぜになって怪物のような手になり、自分すらその一部にしようと引っ張るのだ  
「クソッたれが．．．放せ！！」

しかし、言葉が通じれば苦勞はしない

巨大な豪腕はぐいぐいとしつこく引っ張ってくる  
ふと、自分が突撃砲を握っていることに気がつく  
即座に照準をその豪腕へと合わせ発砲する

響き渡る連続した銃声．．．飛び散る腐敗した肉片、戦術機の残骸．．．

漸く拘束が緩んだところで、その醜い腕から力ずくで逃れる  
そして再び急加速、今度こそ彼女の元へ駆け寄る．．．だが、その  
時であった

クソ忌々しい奴．．．光線級が目に入った

そして、狙いを定める先にはあいつの機体．．．しかし、あいつは  
気づいていないのかはどうかは知らないが、ひたすらに目の前のB  
ETAと戦い続けている

「この．．．アホンだらが！」

光線級の目のような部分が光り、レーザーが照射される

しかし、間一髪であいつの機体だけは突き飛ばした

「どける！アイリス！！」

『！！』

目の前が光に包まれる．．．

回避は不可能、見事直撃だ

『．．．！！！！』

最後にあいつが、何か叫んでた気がするが．．．さっぱり聞こえな  
かった

重side

次の日になりました

今日も前途多難な一日になるだろうな

「・・・」

って言うか寝起き最悪なんだけど

多分、最高に胸糞悪い夢を見たせいだ・・・

「・・・あれ？どんな夢だった？」

まあ、その前に夢の内容が思い出せない

結構印象強い、今までで悪夢ベスト3には入るほどだった気がするけど・・・

「・・・思い出せねえ」

うーん・・・

でもまあ、ケロッと忘れるくらいだ、案外大した事無かったりするのか

「まあ、良いか」

さて、そろそろ起きて準備しますかね・・・今日もお仕事お仕事

・・・しばらくお待ち下さい・・・

いつも通りの部屋へ行き、アルゴスメンバーと顔を合わせる

「おーっす」

「おっ！大尉おざーす」

「はいよ、おはようさん」

「おはよう」

「はいはい、おはよう」

「あ、クソオヤジ」

「・・・お父さんは、お前みたいなクソガキを育てた覚えはありません  
育てるなら、万人に愛されるお淑やかで可憐で聡明な子に育てま

す」

「あんだと？朝っぱらからケンカ売ってんのか？」

「何だよ、いっちゃやるか？」

「上等だ！この野郎！」

「受けてたつてやるよ！こん畜生！」

本日の第一戦目・・・

だが、困ったことに寝起き最悪の俺はコンディションがイマイチだ  
長期戦になれば不利なのは明か・・・ここは短期戦だ！

「大体何がお淑やかで可憐で聡明だよ！お前に出来るわけねえだろ  
！！」

「うるせー！少なくとも、お前みたいな残念な子にはしたくない！」

「アタシのどこが残念なんだよ！」

「色々と！」

「んだとコラア！」

ぐ・・・くそう、中々やるな

どこの戦闘民族だ？このチビ助は

ユウヤside

俺はヴィンセントと別れていつもの部屋に向かっていた  
ふと、中が騒がしい

うるさいな、と心の中で愚痴りながらもドアを開ける

「シェー！！！」

「気持ちワルッ！？なんだソレ！！」

「油断したな！隙ありじゃボケエ！」

「甘いんだよ！グルカ嘗めんな！！」

「グルカ？食堂行け！」

「グルメじゃねえよ！！」

「うるせえな、まったく」

「お、トップガン来たか」

「何騒いでんだ？あの2人」

「いつもの事よ、2人にとって挨拶のようなものね」

2人・・・1人は昨日模擬戦の相手だったチヨビ

もう1人は・・・

「ぜえ、ぜえ・・・」

「ほらほら、どうした？おっさん息が上がってるぞ！」

「・・・バーカ、嘘じゃボケエ！」

「あつ・・・ぶねーなボケエ！」

「チツ、避けやがったか」

「へへん、当たるかってんだ」

もう1人は日本人のおっさん・・・神無月重大尉

聞くところによると、各国では言わずと知れた有名な衛士らしい

だが、どうにも納得出来ない・・・

それに、何でこんなバカみたいな奴がN22YFに乗ってるのか分

かからねえ

「おおーい、その辺にしようぜお二人さんよ」

「・・・」

「・・・」

マカロニが声を掛けるも、2人の戦闘態勢は収まる気配はなく、む

しろ互いに牽制を掛け合っている

「いい加減にしないと、イブラヒム中尉に怒られるわよ？」

大尉はともかく、タリサは既に一回前科があることを忘れてない

でしょうね？」

「・・・まっ、ここは一時休戦といこうか？」

「・・・ちっ、分かったよ」



互いに背を向け引き下がる2人

「（やれやれ、やっと終ったか）」

だが、その認識は甘かったとしか言いようがない

このバカ2人、バカな癖に変な意地だけは一級品なのだ

「なんて・・・」

「言うと・・・」

「！！！！」

「思ったかボケEEEEEEEE！！！！」

見事なクロスカウンターが互いの頬に決まる

この勝負、どうやら相打ちので幕を閉じた

「！！（こいつらアホだ）」

多分、他の2人も同じ事を考えてんだらうな・・・

## 重side

顔面に、このチビのクロスカウンターが見事決まった頬を、一生懸命丹精込めて出来るだけ優しくなでる・・・くそう、あのチビめ、容赦なくぶつちぎりやがった

「（痛い痛い痛い飛んでいけ・・・ってか）」

これ考えた奴はどうやら頭のネジが全部吹っ飛んでいると見える  
こんなので痛みが消えたら世界はもっと穏やかになっている筈だ

「（痛てて・・・あのおっさんめ、躊躇無くぶちかましてきやがった）」

「（この借りは・・・）」

「（必ず近い内に・・・）」

「（（倍にして返してやるよ！！））」

「そういや、今日X F」計画の主任が来るらしいんだけど・・・  
何でも、由緒正しい日本の家系らしいぜ？」

「ああ？ネパールで言うグルカみたいなもん？」

「お腹すいたなら食堂行け」

「だから違うつて言っただろ、バカ

話をかき乱すな、バカ」

「2回言わなくても良いだろー？」

「バカ×クソ×チビ・・・略してバクチ」

「死ね、マジでダメなオツサン

略してマダオ」

「タリサも乗らない・・・でも、グルカは世襲派でしょう？」

「少しニュアンスが違ούνじゃないかしら」

「・・・フン、サムライだかニンジャだか知らねえが

B E T A相手にカタナ振り回す連中だろ？時代錯誤も甚だしいぜ」

「大尉の前で言うねートツプガン

昔の女とか？」

「違えよ」

「ユウヤとやら、それ唯依ちゃんの前で言ってみろ、引きちぎられる

ぞ・・・

「（大尉、良いの？）」

「（あ？何が？）」

「（・・・彼、貴方の祖国を思いっきり言ってるけど）」

「（良いんじゃない？人それぞれ思うところがあんだろ

特に日本と米国の戦術機運用を比べれば分からなくもないし・・・

個人的に言っても、日本にいた年数は他国にいた時と比べても  
圧倒的に少ない俺にはイマイチ実感が湧かないんだよね）」

「（はあ・・・それは器が広いと褒めるべきか、適当と避難すべき  
か微妙なところね）」

「（前者でお願いする）」

「（・・・考えておくわ）」

「アタシは堅つ苦しい奴じゃなきゃ誰でも良いけどね」

「（ないない、それは絶対にない）」

その時、入り口の扉が開き、旦那が入ってきた

「おはよう、諸君・・・神無月大尉、少し良いですか？」

「やだ」

「まだ何も言つてませんよ」

「それでもやだ」

「主任を前にしても、同じ事が言えますか？」

「前言撤回します」

「（扱いやすい人だな）・・・それ程難しい用事ではないですよ、直ぐに今言うハンガーへ向かつて下さい」

「えゝゝ・・・」

やつぱり、嫌だ・・・そう言おうとしたとき、旦那の後ろで鋭い眼光が煌めく

言わずもがな、誰かは言わない

「今すぐ行つてきます」

即座に退室、即座にダッシュ、いざハンガーへ・・・こん畜生

・・・・・・・・しばらくお待ち下さい・・・・・・・・

「で、何で俺ここにいるワケ？」

「何も聞いていないんですかい？」

「そんな暇無い、ダッシュで来たからな

整備ボスよ」

「ボスって．．ハア、話に聞いてたとおりの人だ」

「で、何か用？」

「なんか、何処かのお偉いさんが来て、大尉にこれでテストさせろと命令してきましたよ」

「．．嫌な予感しかしねえよ、どこのお偉いさんだよ」

「さあ、よく分かりませんでした．．．」

おい！お前ら！大尉に例の物を見せてやれ！

「こいつは．．．」

見た事ねえ機体だな、新型か？

「MiG-701って書いてありますね．．．」

「おいおい、MiG-701って．．．」

「知ってるんですか？」

「ああ．．昔友人からちよつとした話を小耳に挟んだ

何でも、こいつは破棄された計画の筈だが．．．」

「破棄された計画．．ですかい？」

「詳しい理由は別段興味は無かったから覚えてねえが、間違は無いだろうな．．．」

そのお偉いさんってどんな奴だった？」

「黒服を着て、いかにも国家の重鎮って感じていたね

テストが一段落したら、取りに戻ると言っていました」

「ふーん．．（現代に蘇った亡霊ってところだな、さて、影のネクロマンサーはこのどいつだ？）」「．．どうします？」

「どうしますって．．俺達衛士は、与えられた任務に文句は言えん乗ってテストするしかないだろ？お偉いさんからのリクエストなら尚更だ」

「．．難儀な職業ですね」

「何を白々しく言ってるんだよ」

「別にそんなつもりじゃないですよ

これ、仕様書です」

「はいよ、どれどれ．．．」

なんじゃコリヤ!?

「・・・どうかたんですかい?」

「・・・無茶苦茶な設計だな、オイ」

「・・・って言うかこれは、何というか

「（確かに対BETAに有効だろうが、これではまるで・・・いや、十中八九で戦術機同士の戦闘を意図した仕様になってるぞ・・・）」  
エンジンの主機出力だけでも相当な数値だ、特に瞬間的な速度は恐らく圧倒的だ

それだけじゃねえ、武装の種類が豊富すぎる

火力だけで見れば、戦術機の中でもトップクラスだな・・・とにかく空いたスペースに武装をねじ込んでやがる・・・スタイリッシュな外見とは裏腹に、えらくバランスの悪い戦術機だな

まさに一撃離脱の仕様だ・・・そして、その豊富な火力でコンマ何秒かで敵を削る、一撃必殺をも目的としている

こんな無茶苦茶な機体、乗り続けてたら中の衛士にどれ程の負担が掛かるか・・・想像したくもねえ

「・・・人体実験、か」

「?」

攻撃力と機動力をとことん突き詰めすぎた、ある意味最悪の機体だ

「・・・乗ってる奴の事なんざ、まるでお構いなしの”衛士殺し”の戦

術機

そして、こんな事を知ってて実行するのは俺の知っている中で1人しかいねえ・・・使える駒は何でも使う

嫌な性格は相変わらずじゃねえか、あの野郎

「まっ、あれこれ言ってもしょうがねえ・・・直ぐに準備してくれ」  
「了解」

嫌だなあ・・・これもう失敗作決定だろうが

何なんだよ、あの野郎はよお・・・俺を殺す気かよ

絶対知っててやってるよ、質悪いなあ・・・

．．．．．しばらくお待ち下さい．．．．．

やつと着替えてコックピットに搭乗

さあ、行くぞ！

「行つてきまゝす」

グン．．．と機体を加速させる

本来なら、ゆつくりと速度が上がっていくはずだが．．．

「おおぅ！？」

グン！といきなり速度が上がる、それにより一瞬視界が真っ白になった

「！？」

そして、気づいたときには遅かった．．．

ガターン！！と言う大きな音と共に、衝撃が肉体を襲う

目を空けると、地面が見える．．．何で？

しばらく考えていると、通信が入ってきた

『あのー．．大丈夫ですか？』

「現状が理解できないんだけど？何があつたの？」

『盛大に転びました』

「．．．マジ？」

『はい』

なるほど、それなら納得．．．地面が見えるわけだ  
つまり、俯せになっているという事か

「（なんつーピーキーすぎる機体だよ、まったく．．．最初から全力疾走じゃねえか）」

『問題があるようでしたら、テストを中止いたしますか？』

「いや、続行だ．．．何ともない」

ゆっくりと機体を起きあがらせる

『では、テスト内容を確認します．．．』

気を取り直していきますか

その頃、別のテストサイトでは．．．

「驚いたぜユウヤ！」

オレやタリサのスコアを軽く上回りやがるとはなあ  
新入りなら少しは先輩に遠慮しろよ？」

「ま、この手のコトは米軍でさんざん叩き込まれてきたからな

これであのお姫さまも舐めたクチきなくなるだろ」

「おいおい、女には優しくしておくもンだぜ？」

「あんな堅物そうな女のどこがいい．．．！！」

2時方向よりドローン28機高速接近中！どつかのヘタクソが撃ち漏してもしたのか？」

「向こうのテストサイトはソ連軍が使っているな、追撃している戦術機が一機

S U - 3 7 U B ・ チェルミナートル」

「！！！」

「．．．このカンジだと演習エリアの外縁空域まで到達するんじゃないか？

せつかくだし、近くまで寄って撮っておこうぜ、映像記録」

「ああ（氣にくわねえ任務だったが、少しは楽しめそうじゃねえか）

」

またまた戻ってこちら、MiG-701のテストサイト  
 そこでは、一機の戦術機が複数の無人機に追われていた

「オooooooooooooo!」

『どうかしたんですか？』

「何他人事みたくなってるの!？」

何でドローンが実弾兵装してんだよ!!!マジで死ぬわ!!!  
うえぶ!

その前に、マジで色んなモンが出るわ！内蔵飛び出るわ！この戦術機どんだけ辛いかわってる！？」

☞ 仕方ないです、耐えてください

耐えながらペイント弾でドローン全機落としてください」

「やってるよ！．．．って言うか何でペイントが直撃したドローンがお構いなしに襲ってきてんの！？機能停止させるよ！離脱させるよ！未だに戦力比が1対多数なんだけど！？」

『それがこのテストの醍醐味です、お楽しみ下さい』

「楽しめねえよ、ドローンに殺されるとか洒落になんねえよ！その前に戦術機に殺される！」

うわ！？今掠ったぞオイ！！

これがシミュレーターならまだしも、現実なんですけど……さつきからガチで殺す気だぞ、アイツら……どうしろって言うんだよ

ペイントで当てた奴等も何か襲ってくるし、気を抜いたら殺されるし、その前に……

「オウ・・・ウエプ」

は、吐きそうだ

この戦術機、速度が上がり下がりが急すぎる



内蔵がシュエイクされすぎて、体内で軽くジュースが出来てるに違いない

「・・・こ、うつぶ、なったら、腹を括るしかねえ」

さつきから括ってるけど、もつと括るしかないぞこれ・・・

「ドローンが！調子にのんなぁ！！」

一気に機体を急加速・・・しようと思ったけど、やっぱり止めといた、辛い

「・・・」

やっぱりこのままの速度で隙を見よう・・・

ユウヤ side

『ん？』

「どうした？」

最初に気づいたのはマカロニだった

『向こうからも、何か来るな・・・』

「・・・！」

丁度、チエルミナートの反対側の方角から、何かが見える

よく見ると・・・戦術機が複数のドローンに追われていた

それだけではなく、ドローンからは連続した曳航弾が見える

その曳航弾は、戦術機目掛けて飛来するが、当の戦術機は難なく避けている・・・ように思えたが

『おお！良いところに！！』

『何やってんですか？大尉』

て言うかその戦術機は？」

『よくぞ聞いてくれた！簡単に説明するぞ、何か乗れって言われて乗ったら、実弾兵器を搭載したドローンを全機打ち落とせって言われた』

聞き覚えのある声、あの日本人、神無月重大尉であった

『と、言うわけで手伝って！！』

『・・・どうする？』

「・・・」

情けなさ過ぎて何とも言えない・・・

オレとしては助ける理由も手伝う理由も全くない

それどころか、日本人の言う事なんて聞けるか

ほっとけ・・・と言おうとしたときだった、何やら通信が入る

『こちら、MiG-701のオペレーターです

くれぐれも！その機体に手を貸さないで下さい』

『オイイイイイイイ！！』

そんなに俺のこと虐めて楽しいか！？お前友達いないだろ！！』

『そんなことより、大尉

直ぐにテストサイトに戻って下さい、どんだけコースから外れてるんですか

流れ弾が貴方の他の機体に当たって取り返しが付かなくなったら、責任は貴方に取って貰います』

『ふざけんなババア！コラア！！』

何でこここの人間は俺に対して意地悪なんだよ！！』

『・・・そう言う態度が原因していると思えますが？』

『嫌だ！俺はここを離れねえ！どうせなら2人も道連れじゃあ！！』  
何を血迷ったのか、このバカは俺達2人の方に突っ込んできた

・・・当然、後ろのドローンもオマケ付きだ

『あー！ー！もう、いい加減にしるよダメ人間コラア！！お前に付き合わされるこっちの身にもなってみろ！！』

『オペレーターさーん！なんかキヤラ変わってるよ！！』

『さつさと全機落として来い！お前さつきから逃げてばつかじゃねえか！！』

『機体の感覚が掴めねえんだよ！！何だコイツは！？モンスターマシんじゃねえか！！』

何で俺の周りはモンスターだらけなんだよ！お前も含めてな！』

『もう一回言ってみろ！！このクズ野郎！！』

「・・・やっぱアホだ」

取り敢ず、安全地帯まで遠ざかってチエルミナートの機動を見る西側では、紅の姉妹とか言われて恐れられているようだが・・・

「（イマイチ感じられねえな、この程度なのか？）」

いや・・・そうじゃねえ

「やっぱドローン相手じゃ燃えねえよな」

オレは機体を急加速させる

チエルミナートルが最後のドローンへ接近していた

そのドローンへ照準を絞り、トリガーを・・・

『はい。邪魔』

「・・・は？」

大尉の機体が目の前を横切ったかと思うと、通り過ぎ様に腕を横薙ぎにする

どうやらそのドローンが邪魔だったらしく、薙ぎ払われたドローンは飛行能力を失い、地に落ちていった

「・・・」

『ギャー！！！！』

テメエ！何ソ連領に進入してんだ！国際問題だぞ！？』

『いちいちうるせえなあ、ちよつとくらい良いじゃん』

分かった分かった戻れば良いんだろ戻れば』

ドローンに追いかけながらも大尉がこっちの空域に戻ってきた

『ようやく機体の感覚が掴めてきたぞ・・・そんじゃまあ、攻撃いってみますか』

即座に反転すると、ドローンに向かって突っ込んでいく

「（速え．．．！）」

弾丸が飛び交う中、滑るようにして次々とペイント弾をドローンに命中させていく．．．

遂に最後のドローンがペイントで染まる

『．．．テスト終了』

色々言いたいことがあるので、早めに戻って来て下さい』

「．．．」

成程、ただのバカではないってことか

『オウエエエエエエ！！』

『大尉！そこは流石にヤバイって！早めに帰還しないと！』

『そーする．．．』

．．．やっぱりただのバカだった

そう思っている．．．ゾク！と背中に悪寒が走る

振り向いてみると、チエルミナートルが空中に静止しながら、ある

一点を見つめていた．．．それは、大尉の戦術機

今にも襲いかかってきそうな勢いだ

そりゃそうだろう、あんな事されれば誰だって怒る

しかし、チエルミナートルはそのまま反転し、向こうに飛び去ってしまった

「．．．」

『ユウヤ、俺達も戻ろうぜ？』

「ああ．．．そうだな」



## とうづえるぶ

俺達がやる戦争なんて、ババ抜きと大して変わらない

ババを引いた奴は死あるのみだ

その中で英雄なんて呼ばれてるのは、卓越した戦術眼と巧いイカサマしてるせいだ

まあ、本当の戦いは何でもありだ、だったらそれもありだと思うけどね……

俺？俺は運が良いだけさ、偶にフォールドして勝負を下りるけどな

勝ち目がないなら逃げるのもまた一手さ……かなり恨みを買っけど

重side

「良いかーてめえら」

「……？」

急に何言い出すだど？まあ、聞いとけって

「ここには任務で来てるんだからな！

ミッションだぞミッション、遊び感覚ではしゃぐんじゃねえぞ！

シミュレーターとは言え戦場は魔物だ、気を抜いたらあーっとい

う間に呑み込まれんぞ」

「大尉、それ人に言えるか振り返ってみてはどうスか？」

「そうね、一番心配なのは貴方ね」

「おっさん意味分かって言ってるの？自分に言い聞かせるよ」

「……」

こ、この連中は……人がせつかく喝を入れてやってんのに！

「それよりも、その頬に当てたガーゼは何？」

「・・・触れないでくれ、傷に染みる」

色んな意味でな・・・

あのテストの後、ちゃっちゃと帰った瞬間オペレーターにタコ殴りされた

土下座してようやく許して貰えたが・・・見ての通り、恐ろしい破壊の爪痕がくつきり残ってしまった

地獄絵図を生きながらにして垣間見るとは・・・人生何が起こるか分かんねえな

「まあ、俺はどうでも良いとして・・・今回は西と東の共同作業らしい

内容は、みんなで協力して仮想・BETAを迎え撃とう・・・だ良かったな、俺はこういうミッション大好きだぞ

やっぱり人間は互いに手を取り合うべきだよ、ウン」

「何なのそのぬるま湯みたいな言い草、ムカツクんだけど」

「おめえには、初から何も期待してねえよ、チビ助が

今回は面倒事起こすなよ、もう二度と尻ぬぐいなんざ嫌だからな

！！」

「うつせーよ、誰が頼むか！」

「頼まれてもやんねーよーだ！」

「いい加減にして頂戴、遊びできてるんじゃないんでしょう？」

「そうだったな、スマンスマン」

「・・・ハア、まったくもう」

「よーし、各自準備始めろよ」

「そんじゃ、仮想戦場で会おう」

「じゃ、俺もあの機体に行きますか・・・MIG701、通称”コンドル”」

俺が名付けたんだけどな、結構格好いいだろ？

何故みんなのところからじゃないかって？そりゃあ、あの機体は少し離れたところにあるからだ

完成されているとは言え、非公開の戦術機だ

まだ他の奴等と並べるには早いと、あの男は判断したんだろうな・  
・真相は知らんけど

「フンフンフーン」

鼻歌歌いながら移動する

何？いい歳扱いて鼻歌歌うなだあ？

良いじゃないの、別に減るもんじゃないし

「ん？」

そうこうしていると、件の戦術機の上に辿り着く

だが、その戦術機の前に誰かがいた

「あ、どうも」

「・・・誰？」

「こりゃ、失礼しました

ヴィンセント・ローウェルって言います、自分」

「ふーん・・・

で、何か用？いや、この機体に用か？」

「そんな睨まないで下さいよ、ちよつとした個人的な興味っすよ」

「・・・興味本意で首突っ込むなよ

こいつの裏には、少々厄介な奴が関わっているからな」

「その厄介な代物を押しつけられるなんて、ただ者じゃないでしょ？

ね？Bloody Eaterさん？」

「フン！」

「いで！？」

「ヴィンセント君？

その耳の穴を目一杯広げて聞けよ？

俺の目の前でその名前を口にすんな、ぶつぞ」

「いてて・・・もうぶってるじゃないですか」

「こんなもんぶった内に入んねえよ」

「（メチャクチャな人だな・・・）」

「と、言うわけで、俺はこれから任務がある

それじゃ、また会おうヴィンセント君・・・なかなか格好いい名



前じゃないか

ユウヤ君といい、中々クセ者揃いだな今回は」

「・・・あなたから見てどうですか？ユウヤは」

「さあ、人の価値観なんざ人それぞれだ

俺には何とも言えないね」

「ケチケチしないで下さいよ」

「ケチじゃねえよ・・・まったく」

そのままM i G - 7 0 1・コンドルに搭乗する

すると、無機質な機械音と共になんたらシステムが起動して、目の前が開けた荒野に早変わりする

俺の傍には、既にアルゴスマンバーがそこにいた

「よし、全員集まったか？」

氣イ引き締めろ、これから連中がウジャウジャ出てくるからな」

「んなこたあ知ってたんだよ、おっさん少し黙ってる！」

何やら目の前のA C T Vがうるせえな

「チビ助、フレンドリーファイアって知ってるか？背中には常に気を配れよ？」

うつかり・・・何て事も有り得るぞ」

「へっ！お前もな！」

「はいはい・・・おい、ユウヤ！吹雪の乗り心地は如何？」

「・・・」

「なんだあ？アイツ何であんなに不機嫌なんだよ

朝飯食い損ねたのか？」

「オツム付きを押しつけられたからだろ？」

「何ソレ？吹雪のこと言ってるの？お前らアホだな」

アレはアレで結構な高性能機だぞ？練習機なんて失礼な名称誰が付けたんだか・・・」

「おっさんから見れば全部が全部、高性能機なんじゃないの？」

「言い得て妙だな・・・」

まあ、確かに昔と比べると随分進歩したものだ・・・人類は」

「？」

「あの頃はもつと酷かったからな．．．」

．．．そう、昔と比べれば流される血の量は大幅に減ったと思うそれは人類が確実に歩みを進めている証、素直に喜ぶべき事柄しかし、まだ足りない

まだ俺達は負けているのだ．．．

止まることは許されない終り無き旅路．．．これを地獄と言わずに何と言う？

「！．．．来たみたいだな」

そんなことをボーツと考えていると、どうやら始まったようだ荒野の向こう側から来るわ来るわ、巨大な津波の如く襲いかかってくる

「そんじゃ．．．始めようか？」

今度は安全装置をすっかり外し、ジャコン．．．と突撃砲をリロードする

仮想BETAか．．．死ぬ必要がないから気楽で良いな

コウヤside

「オラァー！！」

「失せろやコラァー！！」

迫り来るBETA相手に全く怯まずに攻撃を仕掛け、その侵攻を食い止めている

”僅か2機で”．．．だ

「ヒュッやるねえ大尉」

「案外、タリサと相性が良いのかしらね」

それに続くように、マカロニと彫刻女も2人を援護するように立ち回っている

俺もそれに続こうとしたときだった

「!？」

機体が不安定に傾く

バランスが全くとれないのだ

「(何だよ！？コイツは・・・!)」

突撃砲の狙いを定めるのも至難の業だ

狙って撃ったつもりが、全く当たらない

『何遊んでんだ！ユウヤ！』

「ッ！すぐ行く!!」

しかし、跳躍からの着地で大きくバランスを崩してしまう

戦術機に完全に振り回されてることに苛立ちが次第に募っていく

「おまけにこのバカみたいな数・・・!」

『泣き言か？トップガン!』

『この程度、アジアじゃ普通だぜ』

『ヨーロツパもなあ!!』

「ッ!!(こいつら・・・)」

此処にいる奴等は各々の腕を買われて配属されているのだ

侵攻を食い止め、撤退を繰り返し、そしてその繰り返し・・・

所謂、対BETAのスペシャリスト・・・実戦経験から言えば自分

とは比べものにならない

「(だけどなあ・・・)」

アルゴス1を背負って居る以上、無様な姿は晒せない

「(言うとおりにしろよ、ポンコツめ・・・!)」

自機にそう言い聞かせ、戦闘を続行した

重side

『こちらアルゴス3』

アルゴス1の位置から崩れ始めてきている』

『アルゴス4了解、ただし、こちらもそれ程余裕はないわ』

「・・・」

『トップガンが足引つ張ってるぜ？』

「うーん・・・このままじゃ厳しいな

仕方ない、少し防衛戦を下げるぞ、各機援護してくて』

『何噛んでんだよ』

「・・・俺こういうの苦手なんだよ」

『こちらアルゴス4、アルゴス1はどうするの？

私を含めて全員、他機を援護する余裕は無いわ』

「・・・みなさんどうします？」

『『『『・・・』』』』

何で全員俺のこと見るんだよ・・・言いたいことは分かるけどよ、それは酷いぜ

「わかった、わかったよ

本物の戦場なら御免被るが・・・」

生憎とこいつはシミュレーションだ

こう言っちゃ悪いが、死の危険が無いため多少の無茶は効くだろうな

「俺があいつを迎えに行く

各機、位置を下げてスペースを取つといてくれ」

『へ！根性見せてみるよ！おっさん』

『アルゴス3了解、まっ、頑張つて下さいよ』

『アルゴス4了解、程々にね』

「・・・やっぱ誰か変わってくんねえ？」

『無理だ』

『無理つすね』

『無理よ』

「・・・腹括るか」

即座に方向転換、アルゴス1の所へ向かう

「よっ、若者

頑張ってる？」

『・・・チツ』

「舌打ちしなくても良いでしょうに・・・まあいいや

状況を手短に説明するぞ」

今から俺と一緒に後退する、前は俺がつとめるから援護ヨロシク」

『・・・了解』

まあ、仕方ないか

捉え方によつては”お前は足手まといだから後ろに下がれ”とも取れるからな

しかし、この状況も分からぬ程馬鹿ではあるまい

プライドよりも任務優先なのは自明の理、此处で我を通せば隊全体に影響を及ぼす

素直に後退するアルゴス1、その援護を受けて俺も前のBETAの侵攻を最低限食い止めて下がり始める

すると、何でか知らんが援護の気配が止む

「どうかしたか？」

『チツ！弾切れだ！』

「しゃあねえな」

両腕に持つている突撃砲の残弾数の多い方をユウヤの方へ投げる

それをユウヤは器用にキャッチした

「ナイスキャッチ、そいつを使い」

『・・・アンタはどうすんだよ』

「心配ご無用」

片背中にマウントしてある長剣を片手に取り、この機体のカタログスペックにあった武装を展開する・・・

肘からショートソード程の長さの鋭利な突起物が顔を出した

さらに、膝付近からつま先に欠けても刃物が出てくる・・・何とも  
言えねえぞ、コレ

「おお！ かけえ！ 全身刃物だ！」

『感心してる場合かよ！』

「まあ、前は任せなさい

どっちかって言うと、ミドルレンジよりクロス・ショートレンジ  
の方が得意だからな」

片手に長剣、片手に突撃砲を構えてBETAに突進する

「ひゃっはー！ こいつは面白れえ！」

BETAを切り刻みながらも、片手の突撃砲で牽制する

長剣は長さをもう少し縮めれば使いやすいな

「早めに後退しろよ、ユウヤ」

『もう後退してる、アンタ深追いしすぎだよ』

「マジ？」

『よく周りを見るよ』

「・・・」

360°全方位に群がるBETA

やべえ、また悪い癖が出ちゃった

夢中になると周りが見えなくなる・・・気がつけば取り返しつか  
ないことも何度かあったな

「ヘルプミイイーーーーー！！！」

全速力でその場から退避する

正直、マジでやうゝあい

「オイイイイ！！ 聞いてんのかコラァ！」

『じゃあな、おっさん

尻ぬぐいはしねえぞ』

『右に同じ』

『貴方を助ける余裕はないわ』

『俺も同じだ』

「薄情な奴等め！血も涙もないのか！

あ！待って！通信切らないで！嘘だつて！」

しかし、無情にも全員から通信が途切れる

畜生共見てろよ．．．

「やってやらあ！」

目の前に立ち塞がるBETAを切り刻み、突撃砲で風穴を開け、攻撃を紙一重で避ける

我が名に掛けて！こんな不細工な連中の餌食になるのは御免だね

「おおおおおおおおおおおお！！！」

雄叫びを上げながら突進む．．．そして

「おお、おっさんスゲーな

素直に感心したわ」

「流石熟練者、やることが違う」

「格好良かったわよ」

「．．．」

何とか防衛戦の方まで辿り着いた

「ぜえぜえ．．．貴様ら、後で覚えてろよ」

ありったけの怨念を込めて言い放つ．．．が見事にスルーされた

「（あゝーこりゃ明日は筋肉痛だ）」

そう思いながら、再度アルゴスマンバーと共にBETA防衛に臨んだ





30分後

「・・・」

「・・・」

「すまん、取り乱した」

「・・・別に、気にしていませんよ（馬鹿なのか？コイツは）」

「・・・すまん、ここはどこだ」

「ふざけてるんですか？」

「頼む、言ってくれなければ俺はまた現実から逃げるぞ」

「・・・どつからどう見ても牢屋の中ですよ、俺達はソ連の軍事施設に不法進入して拘束されてるんです」

「それは所謂？」

「捕虜ですね」

「・・・銃殺刑は？」

「されても文句は言えませんかよ」

「・・・」

「・・・」

「だ、だいじょーぶだよーユウヤクーん  
こんな時は！」

「・・・」

「でれでれってれ〜”ぼ〜うや〜すり〜”

これがあれば、どんなに硬い物でも削り取れる優れものなんだ」

「．．．なんでそんな物があるんですか？」

「俺にもわからない」

とにかく！これであの鉄格子をゴシゴシすれば外に出られるぞ！

「！」

「．．．（今確信した、コイツ馬鹿だ）」

「いいのかな？そんな目で見て

これで俺が出られてもお前のことは知らんからな！」

「勝手にどうぞ」

「フン！見てろよ！！」

ゴシゴシゴシゴシゴシ．．．．．

ゴシゴシゴシゴシ．．．．．

ゴシゴシゴシ．．．

ゴシゴシ・・・

ゴシ・・・

カラン・・・

「・・・どうしたんですか？」

「・・・これやっぱムリ」

「・・・」

「あー！！もう疲れた、寝るわ」

「最初から大人しく寝てくださいよ」

「言われなくてもそうするワイ！」

鉄格子から離れて自分のクソ硬いベットに横になる

oh・・・ジーザス、何て硬さだ

だが甘いな、唯依ちゃんに比べればこんな物天と地の差だ  
敢えて言うならスライムとオリハルコンほどの違いがある

そんな下らないことを考えていると次第に睡魔が襲ってくる

それに抗うのを止めると、自分は夢の中へダイブインした・・・

声が．．．聞こえる

これは悲鳴だ．．．

これは慟哭だ．．．

これは断末魔だ．．．

「（止める、聞きたくない．．．）」

きつとこの声は俺が今まで耳にしてきたモノだ．．．

「（俺は．．．）」

きつとこの中には助けられた筈の命もあっただろう．．．

救えた筈の命もあっただろう．．．

「（俺は．．．！）」

だが俺はその悉くを見捨てた．．．

「（俺は．．．！！）」

それ以上に自分が助かりたかったからだ．．．異常なまでに

「（俺は．．．！！！！）」

俺にはそれを受け止める義務がある．．．なのに、何故

「（俺は悪くない！！！！）」

何故、俺は逃げ続けているんだ．．．？

「ッ!!」

それは最悪の目覚めだ

まるで全身の穴という穴に汚物を流し込まれたかのような  
きつと夢のせいだ・・・そうに違いない

・・・悪夢だ、思い出しただけでも背筋が凍る

隣ではユウヤがウンウン唸っていた

多分俺と同じで悪夢でも見ているのではないのか？

結構苦労してそうだなんな、コイツ・・・

「おい、ユウヤくん、朝だぞー」

「・・・」

パチリ、目が開いた瞬間睨まれた

俺何かしたか？

それともアレか？

可愛い美少女じゃなくてむさ苦しいおっさん一歩手前の野郎に起こ  
されたのが氣にくわなかったのか？

だとしたら何て贅沢な奴だ、俺が抹殺してあげよう

「朝ですか・・・？」

「まあね」

妙に明るいから朝で間違いないだろう

「これからどうなるんだろうな」

「さあ、知りませんよ」

「ドライだね」

「・・・」

そんな黙りこくられても困るんだがな

そう思いつつ鉄格子の前まで来る

くそー、いつ見ても忌々しいな、俺が軟体だったら通れたものを

そんな事を重いながら不動の鉄格子と睨めっこしていると・・・  
「！」

「どうしたんですか？」

「誰か来るな」

「・・・！」

そう、誰かが近づいてきたのだ

そして、その誰かの姿が露わになる

「！！！」

そこには上物のスーツを着込んだ軍人が鉄格子の目の前に立っていた  
その軍人は深く一礼をすると、こう告げた

「此度の非礼を深くお詫びいたします

我々は貴方方を歓迎致します」

「！？」

「（こいつはもしかすると・・・）」

十中八九、”アイツ”の仕業だよなあ・・・

「はあ、案内して貰おうか？」

「勿論でございます」

訳がわからねえ、何なんだ？

俺が今いるところは、あのかび臭い牢獄とは無縁の場所だった  
豪華な長テーブル、中央にはソ連の国旗らしき刺繍が編み込まれて  
いる

それだけじゃない、テーブルの上には豪勢なワインや食事が置かれ  
ている

「（一体どういう事だよ．．．！）」

「ほれ、ブーツとしてないで適当に座れ」

何故か大尉は偉そうにどっかりと腰を下ろす

すると、傍にいた燕尾服の男がグラスにワインを注ぎ始めた

「何やってんだ？」

「．．．！」

俺は内心動揺を隠しつつ大尉の隣に座る

「（これはどういう事ですか．．．！？）」

「（ああ、多分俺の知り合いの仕業だ

良かったな）銃殺刑の心配は七割方不要になったぞ？」

「（．．．残りの三割は？）」

「（面倒事だ）」

「（．．．？）」

「なあ、そうだろう？」

ロゴフスキーのおっさんよ」

「．．．久しいな我が最高の同士よ」

迫力のある声が響く

次の瞬間、奥の扉から1人の男が現れた

「遠い昔のな」

「そうつれないことを言うな」

「！！！」

何なんだ！？この男は！！

本当に．．．訳がわからねえ！！！！

そうだそうだ、じゅうわこえたあたりか

持つべきは友だ!!

どういうワケか癖がありすぎる連中ばかりだ  
もっと普通の奴はいないのか?

さて、会議室のような広さを持つこの部屋だが・・・

些かカオス空間と言っても過言ではないだろう

部屋の中央に置かれたテーブル、その上には豪勢な食事

奥の壁にはソ連の国旗らしき横断幕が堂々と掲げられている

そして、此処には不釣り合いな兵隊が2名と・・・

「(大尉・・・あの人物は!?)」

「(・・・ブドミール・ロゴフスキー、ソ連のロシア人特権階級で  
構成される中央戦略開発軍団に所属する重鎮の一人だ

ま、軍の階級で言えば中佐あたり・・・かな?)」

「(ツ!?!?)」

「何年ぶりの再会・・・か?我が友よ」



「さあな、俺としてはまた顔を合わせるとは夢にも思ってもいなか  
ったぜ？」

「君ならコソコソと裏口から入らずとも、堂々と玄関から入ればい  
いものを」

「逆にやってみたい気はするな」

「はっはっは、少し寂しいだろうが、微々たる持て成しを楽しんで  
くれたまえ」

「連れもいるが構わないか？」

「他ならぬ君の頼みだ、聞かぬ訳にもいくまい」

「寛大な心の持ち主を友に持てて俺は幸せ者だあ」

「ふん．．．心にもないことを」

と、言うわけで遠慮無しにかぶりつく  
腹が立つことに旨いんだわな、これが

．．．さて、今回の懸念事項がある

そいつを質問させて貰おうかね

「で、お前さんが今回の計画に携わっているということは．．．何  
かしらが起きるな？」

「今のお前には話すことは出来ん．．．が、起こすつもりではいた  
「ほう．．．？」

「君の祖国は中々面白いオモチャを開発しているそうだな？」

「まったく．．．もう情報が回っていたか」

帝国情報省は何やってんだか．．．ある意味国家のトップシークレ  
ットを簡単に、それも何よりも厄介なこの男に知られてどうすんだよ

「今回の計画のタイミングを見計らって接收する気でいたが．．．  
君が関わっているなら諦めざるを得ないな」

「．．．ホントかよ」

「興味はあるが、そこまでして欲しい物でもない」

「まっ、その気になればお前さんお得意の情報網で何時かは辿り着  
きそうだな．．．」

「遅いか早いかの違いだ、何より嘗ての友を敵に回すのは気が引け

る」

「そこまで買われていたのか．．．過大評価だな、良い迷惑だ敵に回したくないのはこっちも一緒だな」

「だが、別の物は頂くぞ？」

「．．．すげえ嫌な予感がするんだけど？」

「それには及ばん．．．例のプレゼントのデータを頂こうか？」

「やつぱりお前の差し金だったか．．．全くふざけたモン送りつけやがって」

「中々楽しめただろう？」

「どこに楽しめる要素があんだよ！」

「破棄した計画蘇らせやがって、心臓に悪いわ！」

「私が人間を使った実験などいつものことだろう？」

「お前は友人の扱いが乱雑過ぎるんだよ」

「そのくらは見逃して欲しいものだな」

「ケツ！元から取っていくつもりだった癖に何言ってんだか」

「そう毒づくな、どちらにせよ今回日本のXFJ計画とやらには手を引こう」

「心おきなく開発に専念してくれたまえ」

「何様だよこん畜生．．．」

「で、”衛士殺し（パイロットキラー）”の異名を取るあの機体、乗るのは真つ当な人間じゃ無いんだろう？」

「何度も言うが．．．今の君には、その先は言えんな」

「君がもう一度私の元へ来るといふなら話は別だが？」

「丁重にお断りしよう」

「ならば質問には答えられない」

「今の君は私個人の観点では友人だが、公で見れば日本の尉官に過ぎないからな」

「へいへい、ご立派なこと．．．まっ、俺もそこまで知りたい内容でもないからな」

「非情に残念だ、連れ戻せる機会をフイにしてしまったからな」

「ソ連を出す手助けをしたのはどのどいつだ？」

「しらんな、そんな物好きは」

「何を白々しい」

一氣にワインを煽る

程よい甘味と酸味がマッチしていて癖になりそうだ

「で、君は何時までそのスタンスを崩さないつもりだ？」

「ああ、”誰にも縛られず、誰にも犯されず、故に誰にも報われない”……ってヤツか？無論行けるところまで」

「大層な矜持だ、聞いていて笑いが漏れそうだ」

「喧しい」

「気をつける友よ、君には思っている以上に敵が多い」

「既に身を持って体感してる」

「私は今回手を引くが……生憎とそうは思っていない輩が少なくともいるだろうな」

「それは何とかしてくれ、非常にに困る」

「無論出来る限りのことはする、君は中央にも顔と名が効くからな・  
・抑止力にはなりうるだろうが、全員がそうなるとは思わないことだ」

「有り難い警告をどうもありがとさん、その時は自分で何とかする」  
「そう簡単にいくと思うなよ？」

国家というのは思っている以上に複雑で粘着質だ、それを忘れるな」

「昨日の友が今日の敵、今日の友が明日の敵にならないことを切に願うよ」

「私もそれだけは御免だ」

「……さて、ごっそさん

ここら辺でお暇させて貰おうか」

「帰りの足を用意させよう、暫し待て」

「そりゃ有り難い」

さて、皆さんはこのブドミール・ロゴフスキーと言う男をどう思っているか知らないが、1つだけ言わせて貰おう  
今の会話こそ寺の坊主の頭のように丸いが、実際は違う  
この男の主成分は冷徹、非常、鬼畜．．この三要素で大体ができている

嘗てコイツの部下的なポジションだった俺にはよく分かる

目的のためなら手段を選ばず、障害となる者は迷わず切り捨て、どんな外道にも手を染める．．そういう人間だ

いや、コイツを人間と例えるのは些か酷か．．

とにかく関わったら良くないことが起きる奴なのは確かだ

そんな奴に臆病者の俺が何で付いてるかって？

そりゃ、当時ソ連に雇って貰った時には味方皆無だったから強力な権力を持つ者に媚びるしかなかったんだなこれが．．

なんかかんやしていたら友と呼ぶ関係まで築き上げちまった．．

向こうはどうだか知らないけどね

まっ、こいつの言い渡してくる仕事なんぞトラウマものばかりだ先のような新型機のテストなんぞ珍しいものじゃない、それに乗ってみたなら安全基準を満たしていない物ばかりなんてしょっちゅうだった

他には自分の障害になる奴を殺してこいだの、成績不振な被検体を処分してこいだの．．まあ、あの時代は本当に苦労したね

勿論BETAのいる戦場に放り出されたこともあった

無茶苦茶な状況下だったけどな．．兎にも角にも人使いの荒い奴だったな

まったく、ああいう奴はつくづく正義感溢れるピカピカの主人公勇者様に倒されてしまえと思っちゃうよな．．寂しくはなるけど自分で言っていてアレだけど、その可能性は俺自身にも否定できないな

間違っても日の目を浴びる様な役柄じゃねえからな．．やられ雑

魚沢「つてところか」

数時間後・・・

さて、ユーコン基地に帰って来た俺達だがソ連側のお迎えは国境までだそうだ

ここからはウチのお迎えが来るらしい

「さつさと来ねえかなあ」

「（恐ろしい鱗片を垣間見た気がするぜ・・・）」

・・・何やらユウヤ先生がさつきから黙りこくってる  
ロゴフスキーとの会話中ずっと大人しかったな

「・・・ビビってる？」

「ッ！？誰が！！・・・ですか？」

「いや何となく」

「何なんですか急に」

「いや、ユウヤ先生随分静かだな．．．と思って」

「．．．大尉こそ、営倉の中では思いつき取り乱していましたよね？」

「アレは純粹に過去に戻りたかったただけだ」

「．．．（やつぱり馬鹿だ、このおっさん）」

腕は2流の癖にプライドだけは一級品だなとか言う顔してるぜ．．．別に否定はしないけど

否定するだけの材料が無いんだな、悔しいことに

「お？」

「？」

どうやらお迎えが来たようだ、さつさと戻るとしますかねえ

今日は波瀾万丈、霹靂の連続だったぜ．．．要するに濃い一日だった

さてさて次の日

当然の如くユウヤ先生はテスト漬けである

先日唯依ちゃんに罵倒されたのにもかかわらずめげずに生きている姿は涙を誘うね．．．ホントだよ？馬鹿になんてしてないよ？俺なんてあんな事言われたら一週間ぐらい部屋から出てこないもん

モニターではユウヤ先生は四苦八苦しなからハイヴ内を突進む

俺このステージ嫌いなんだよなあ．．．狭いし、暗いし、キモいし  
「くあ．．．」

おっと思わず欠伸が漏れてしまった

「．．．」

隣の唯依ちゃんがギロリと睨みを効かす、なので慌てて欠伸をかみ殺す

だってしょうがないじゃない暇なんだから、他人の戦術機見てるのつまらないんだもの、興味ないんだもの

どうせなら俺もテストが良かったなあ．．．ログフスキーめ、早々とコンドルを持ち去っていきやがった

俺の手元に残ってるのは赤いラプター君のみ、既に完成してる機体の何をテストしろと叫びたいモノだ

「（退屈だ、眠い、煙草吸いて）」

数々の煩惱が俺の心を誘惑する

だが、その程度で屈する俺じゃないぜ．．．嘘です、もう限界ださっさと落ちてくれユウヤ先生、俺を解放してくれユウヤ先生、そうすれば万事解決だ

「（それにしても粘るねえ）」

こいつは素直に賞賛ものだな

見たところ米国戦術機と日本戦術機ではコンセプトがまるっきり違う米国の軍人からすると恐らく理解不能な芸当を見せるだろうな、ウチの戦術機は

それは俺も身を持って体感済みだ．．．国の数だけ戦術機がある、そんな感じかな？

「（お．．．やっと落ちたか）」

まあ、最初の頃に比べれば随分と持つようになったな羨ましいぜ全く．．．これが若さってヤツかね

いや俺も十分若いよ？なのに今ひとつ自分の成長が感じられねえぜ．．．こりゃあ、参ったね

「．．．」

唯依ちゃんがブツブツ言っている隙にそつとその場から離れる  
「（絶妙のタイミングだ、よくやった俺、さあご褒美の煙草だ、啜  
えたまえ）」

啜えた煙草に火を付けながら歩いていく  
あ？スプリングラー？・・・大丈夫だろ？

そのまま歩いていくと、目の前にユウヤ先生が見えた

「いよゝ、おつかれさん」

「・・・どうも」

「はっはっは、疲れてるねゝ若者よ」

「どうでも良いですけど、煙草臭いんで近づかないでください」

「まあまあ、一緒に営倉入りした仲じゃない？」

「（嬉しくねえよ）」

「ま、俺からすればよくぞここまで成長したと言ってやりたいが・・・」

「」

おつと、後ろに唯依ちゃんの反応アリ！

「それを判断するのは生憎と俺じゃないからなゝ」

ちやつかりとユウヤの背後に回る

「じゃ、頑張つてねゝ」

そして全力疾走

室内で喫煙してるところ見られたら・・・考えたくもねえな



またわかんなくなっちゃった

人間ってのは危機的状況に陥れば陥るほど”真価”を発揮する生き物だ

それは戦場で戦う兵士であれ、机上で四苦八苦する科学者であれそうだ

でも、それを発揮できる人間はほんの一握り．．．俺達はそれを”天才”と呼ぶのさ

「タリラ タリラ タリラフッフッフ」

どうも、重っす

ただ今、糞が付くほど暇なので格納庫内を地味な速度で歩き回っています

いやはや、どこを見渡しても整備兵が忙しそうに戦術機の周りを行ったり来たりしていますな．．．大変そうだ、同情するよ  
しかし、そんな光景も悪くはない

何たって最初は整備兵の方が良いと思った事さえあるこの俺だ  
わざわざ命を危険に晒したくないというのは、全く人生どう転ぶか分かったもんじゃないねー

「お？」

暫く歩いていると、見知った顔がいた

「いよお〜ハルトウィック．．．」

やべ、素で話しかけちゃった

「．．．大佐殿、お元気でしょうか大佐殿」

「君か．．．いつも通りで構わんよ」

「感謝、感謝」

こいつの器の広さには脱帽だ

日本の上官だとまず”何だ貴様”とか”無礼だろう”とか喚き散らすからなあ

無駄にプライドだけはアルプス山脈に負けなくらいのどうでもいい高さだからなあ、たまったもんじゃねえ

「で、なにやってんの？」

「ああ、実は．．．」

「おお！これは例の言っていた日本の新型？」

「．．．相変わらず人の話を聞かない男だな

まあその通りだ、X F J 計画の根幹を成す戦術機だ」

「ほうほう．．．で、何か見た目不知火とあんま変わってねえような気がする」

「それはそうだろう、そもそもこれはTYPE - 94に米製パーツを組み込み、新世代に適応させる計画だ

大規模な改修となるとそれ相応の．．．」

「つまりを言うところの突貫工事か」

「．．．言い得て妙だが、君の評価は些か辛辣すぎる」

溜息を吐くハルトウィック．．．なんか馬鹿にされてる？

「お待たせいたしました

ハルトウィック大佐」

後ろから突然男性らしき人物の声が掛かる

振り向くと．．．これまたビックリ、でこ眼鏡がいました（笑）俺、コイツのこと知ってる気がするぞ

「自分の目で確かめないと納得できない性分だね

XFJ計画の根幹を成す機体の組み上げが遅れているとなれば尚更だ

フランク・ハイネマン技術顧問」

おお、思い出した

確か日本でラプターを貰った時に何かいたような気がしたな

「おや？」

と、そのハイネマン氏がこちらを向く

「んあ？」

「お久しぶりですね、シゲル中尉」

「今は大尉だよ」

「おお、これは失礼をしました

で、ラプターの方はどうですか？」

「無駄に性能が良いからな、これといって何もない」

「それは良かった

引き続き、使ってやって下さい」

「はいよ」

「さて、話を戻しましょうか」

「そうだな・・・

今回の件だが、”戦術機の神様”とまで呼ばれたあなたらしくもない事態だが・・・説明して貰えないかね」

「偉そうな名前だな」

「まったくだ」

「ゴホン！

えー、私ごとがそのような評を受けるに値するかは甚だ疑問ですが・・・」

「茶を濁すんじゃないよ

ちよっと嬉しい癖に」

「て、手厳しいですね・・・話を続けますよ

こちらのレポートはご覧になりましたか？」

「うむ・・・」

さすがは米軍のエリートと唸らせられる出色の出来だった」

「私も技術屋の端くれとして彼のレポートには大いに刺激されましてね

この機体の可能性を引き出す為にも予定にない仕様変更を次々と加えたくなってしまったのです

つまり・・・計画全体を俯瞰すればけっして単なる遅れなどではなく、むしろ進んでいると解釈すべきなのです」

「ふむ・・・」

ふむじゃねえよ・・・全く

そっちの都合で進めるな

「・・・お前の解釈は別にどうだって良いが、1つ忘れるなよ

最終的にコイツに乗るのはユウヤ・ブリッジス個人ではなく、日本の兵士諸君だ

技術屋としてお前の言い分も解らなくはないが・・・敵さんは待つてはくれないぜ？」

色んな意味でな、時間が無いのさ

「オプションを付けて喜ぶのは勝手だが・・・その代償として無駄な時間の浪費、扱いづらい機体に仕上がったらボコるぞ」

そこまで言い切る

しかし、ハイネマンはニヤリと笑う

「十分心得てますよ」

「よろしい」

不気味な奴だな

「開発主任の方はどうかね」

ハルトウィックが下で指示を飛ばす唯依ちゃんの方を見て言う

「”一兵士としては”極めて優秀です・・・ただ、柔軟性に乏しく、指揮官としての適正には疑問が残ります

日本の軍人には多いタイプですね」

「それは俺も大いに賛成だ」

「君の場合は私情と私怨が大半を占めているだろう」

「失礼だなコンチクショウ」

まあ、これは冗談ではなく本音なんだが．．．

ユウヤもユウヤで上官に対する態度に問題があるのは事実だ．．．  
しかし、篁唯依にも問題がある

頑固で意固地になって、部下の声がまるで届いていない

結果、部下の懸命な訴えをを聞き逃している可能性がある

互いが互いに問題を抱えてギクシャクしている．．．戦場ではこれは致命的とも言える

ガキの遊びじゃないんだ、次の瞬間にはお陀仏しても可笑しくない  
状況下．．．GAME OVER 死に繋がる中、仲間の連携が最も重要、ましてや数で攻めてくるBETAなら尚更だ

これは衛士や機体の優劣に関わらずとも言えよう

つまりどちらかが歩み寄らなくてはならない、良い意味でも悪い意味でも信頼関係を築く必要がある

それが出来ないならご退場願おう、悪影響を及ぼすだけの足手まといだ

正しく百害あって一利なし．．．だな

「．．．と言うことだ、解ったか？」

「「？」」

「いや、何でもない」

「．．．そう言えば、両国とは安全保障条約を巡った確執があったな」

「それがどうかしたか？」

「．．．よもや個人的な感情を任務に持ち込むとは思えんが、高度な任務ほど些細な人間関係の齟齬が障害となるものだ」

「．．．」

「．．．それはご自身の経験から来るお言葉でしょうか？でしたらそこから2人の会議に入ったようだ

俺は何となくその場を離れ、階段を下りていく

そして何となく、その試作機とやらの前に立つ

「．．．戦術機1つ造るにしても、こうもうまくいかないとはねえ」  
みんながみんな、何かに拘りすぎてんだよねあ．．．人はそれをプライドとも言う

そりゃまあ、人の数だけ国の数だけあるだろうよ

色々な国々、数多の人々を見てきたが．．．どうも理解できないわ  
そんなもん捨てちまえば、後は楽な一本道．．．なのに人類自らや  
やこしくしている

なんとなーくフレームに触る、ひんやりとした感触が少し気持ちいい  
多分コイツにも利権やら利益やらが凄く絡んでいるんだろうよ

「．．．お前はど思う？」

BETAと戦うために在るのに、人間の思想や思惑で俺にはお前  
がガタガタのドロドロに見えてくるぜ？」

手を放して暫く眺める

．．．まあ、別に何かを期待していた訳じゃないがな

「シゲル君、そろそろ我々は戻るぞ？」

気がつけばハルトウィックが後ろにいた

「俺はもう暫く此处にいるさ

頃合いを見て戻る」

俺は彼等に背を向けて歩き出す

「最近ラプターをほったらかしだったからな

今頃拗ねているだろうから、面倒見に行ってくるのさ」

「分かった、満足したら連絡を寄越せ

迎えの足くらいは用意させよう」

「あんがと」

重と別れてから暫くして、4人は軍用車に乗って走り出した  
一通り会話を終えたところで、ハルトウィックは嘗てより抱いていた疑問を口にした  
これは個人的な興味と言っても良い

「篁中尉」

「はっ」

「日本人である君の視点から見ても、彼をどう思う」

「はあ．．．」

「何でも良い、君たちの祖国を捨てた彼を君はどう思う？」

「．．．」

「非難、侮蔑、罵倒でも何でも良いぞ？」

「あの、大佐は大尉と．．．」

「ふむ、良き友でもあるが．．．彼の行為は褒められたものではない  
認めてはいけない許されざる行為だ

もし私が日本人なら、彼を許すことは出来ないだろうな」

「．．．仰るとおりです

大罪を犯した彼を何故、咎めずに生かしておく理由があるのか  
私は、その現状に甘えて愉快そうに笑っている彼を見ると、どう  
しようもない怒りがこみ上げてきます」

「ふむ．．．」

「．．．」

「それだけかね？」

「．．．はい」

「そうか」

「．．．」

「彼が我が国で戦っているときだった」

「？」

「これはあくまで私から見た彼だが．．．」

彼はまるで何かに取り付かれたかのように狂った戦いをする男だった」

「．．．」

「他の人間からは、必死に我が祖国を守るために戦っている様に見えたそうだが．．．」

私には失った何かを必死に取り戻そうとしているかのようにだった」

「！．．．」

「余計な事を言ったかね」

「いえ、出来ればもう少し聞かせて貰えないでしょうか？」

「ふむ、構わんよ」

私としても良い暇つぶしだ」

「Bloody Eaterの話ですか」

私も興味がありますね」

「そうだな、何から話したらいいものか．．．」

「叶うなら彼を、彼の心を癒してやりたい．．．」

「叶うなら彼の傍で”お前は一人じゃない”と囁いてやりたい．．．」

「叶うなら彼を抱きしめて、私の温もりを分けてやりたい．．．」

でも、今の私では駄目なんだ．．．」



触れることすら叶わない・・・

どうすればいい？誰でも良い、教えてくれないか・・・」

「・・・（そう言えば、彼女の縋るような言葉が今でも鮮明に覚えているな）」

たぶんじゅうごくらいかな

自分が特別だっと思って思ったことはあるかい？

俺は何度もある．．．そうしなければ俺はおかしくなってしまうし  
うだから

でも、その度に痛感する

俺は普通の人間．．．いや、それ以下の最低なクズ野郎だとね

『俺を雇え』

彼が血を啜る者の二つ名を手にする数年くらい前のことだ

彼が最初に言いはなった言葉がこれであつた

西ドイツの基地内に堂々と現れた東洋人

黒髪黒眼の身長が180くらい．．．まだ彼こと神無月重が青年と  
呼ばれる年頃だつた

当時私たちの耳にも、前線を渡り歩くイカレた男の噂が届いていた  
のだつた

まあ、私は眉唾物だと思っていたのだがね

そして彼はこう言うのさ

『報酬はいらない』

欲しいのは最低限の衣食住と戦術機だ

その代わりに俺は戦力を貸す」

誰もが啞然となったよ

その後、駆けつけた兵に取り押さえられたのは言うまでもない  
営倉に叩き込まれたのもな．．．

ただ、気になるのはそこが比較的大きな基地だった事

警戒態勢は万全だったと言うのに、どこから進入したか誰も気がつ  
かなかったという

当時の私は少佐の身であり、その基地の最高責任者だった

と、言うのもここまであつさり進入させられたんだ

上層部に何を言われるのか．．．私は彼を使うことに決めた

殺すにしても後々面倒だ、何より意味がない

私は彼の目の前に行き、こう告げた

『君、名前は？』

『．．．アーモンド、そう呼べ』

偽名だったがな

『アーモンド君、私は君を使うことにした

後悔するな、泣き言は聞かんぞ』

『そうかい』

脅すように言ったつもりが、笑われてしまったよ

「これが私と彼の出会い

今から約十数年前の話だ」

「．．．」

「大胆不敵で運の強い男ですね

自分の命でさえも勝負事に掛けてしまったと言ったことですか」  
「そうなるな

そして私は負けて、彼は勝ったと言うことだ

だから私は彼の望む物を与えたよ

風雨が凌げるだけの極寒の寢床

使い古した軍服

最低限度、それこそ余り物の残飯のような飯

当時彼の扱いは一番最低であった

その基地では彼のことをExkremente fliegen.

・ドイツ語で糞蠅と呼ばれていたほどだ

だが、私にはどうすることも出来ない

彼が望んだ事でもあり、そして彼を特別扱いするわけにもいかない  
なぜなら、彼は公式には”いない”のだからな」

彼は常に前線を見張っていた

”見殺し可能な便利な兵士”

それが彼の唯一の存在意義、もし敵を見つけたのなら彼が何らかの  
アクションを起こす．．我々はそれを相図としていた

今にも崩れ落ちそうな戦術機で今日も前線を見張る

もしBETAに遭遇したら真っ先にそれを知らせ、部隊が来るまで  
孤立無援状態を生き残らねばならなかった

弾薬も不十分、機体の整備は劣悪、騙し騙しの方法がいつまで持つ

か．．．

彼の任務はロシアンルーレットよりもスリルの高いものであった  
例えばその日が何事もなくとも、基地に帰還しても彼を労う者は誰も  
いない

いたとしても侮蔑や嘲笑の眼差しだった

そしていつも通り残飯を漁り、痛みすら生ぬるい冷たい水で体を洗  
い、そして暗い倉庫内で眠り、数時間後、数十分後には呼び出しが  
掛かり、前線へ送られる．．．その繰り返しであった

ある日の事．．．

その日はBETAの襲撃があった

しかし、それ程大規模なものではなく、旅団クラスが1～3回の波  
状攻撃を仕掛けてきただけであった

部隊としての損害は軽微であり、帰還した部隊の連中はこぞって近  
くの町まで遊びに行っていた

『全く、下の者は気楽で良いな』

と、愚痴りながら自分の仕事をこなしていた  
気分転換がてら、一端手を止めて外を見る．．．いつの間にか雪が  
降っていた

幻想的な光景は戦いという言葉を忘れさせてくれるかのようなだった  
ふと、視線をずらす

『？』

ずらした視線の先には戦術機のハンガーがある．．．しかし、今現  
在そのハンガーには誰もいないはずなのに明りがついていて

私は怪訝に思い、そのハンガーへ足を運んでいた

中を見ると、装甲が欠けて塗装が剥げ、内部の配線が所々むき出し  
となったボロボロの戦術機が一機と、その周りで作業をしている人  
影が1つ

言うまでもない、彼である

『何をしている？』

私は彼の声を掛けた

『見てわかんねえのか？機体の整備だよ』

『一人でか？』

『やらないよりはマシだろ』

潤滑油を差すくらいなら一人でも出来る』

『！．．！』

一瞬言葉を疑った

確かに一人でも可能だろう．．．だが何十、いや、何百ヶ所あると  
思っているのか！？

大人数で整備するから大したこと無いと思われがちだが、自動車を  
整備するのではワケが違う

『今までやってきたことだ、一々気に留めてんじゃねえよ』

『．．．』

『ああ、そうだそうだ』

これ終ったらアンタ命令してくれよ』

『なんだ？』

『今日は調子が良いんだ  
前線に行かしてくれよ』

『！？』

この男は何を言っているのだろうか？

自分を戦場に放り込めたと？

私にはこの男が恐ろしい何かに見えて仕方がなかった

『お前は．．死ぬのが恐くないのか』

『恐い、ものすごく恐い』

出来れば言つて欲しくない』

『では何が狙いだ？英雄願望か？』

『そんな下らないものに興味ない』

『では何だ？何故そこまでして戦場に身を置こうとする？』

『．．．なあ』

『なんだ』

『あの時こうしておけば』とか『あんなことしなければ』って思  
つたことある？』

『人間誰しも一度はあるだろうな』

『その時お前だったらどうする？』

『その経験を生かし、次に繋げるのが最良だ』

『ふーん、立派なモンだな』

『．．．』

『俺はね、そこまで立派じゃねえからな』

そういう事実があつたとすればソレから逃げたかつた

でも、それをよしとせずに責め続ける自分がいる

だから、逃げたくても逃げられない

難儀な性格だと思わねえか？』

その会話で確信したよ

この男は何か企んでいるわけでもなく、ましてや何かを望んでいる  
わけではない

ただ、何をしでかしたかは知らないが．．彼の言った”あんな事”があり、その過ぎ去った瞬間、失われた時間を正しく取り戻そうとしている  
或いは代わりをその”あんな事”に見立てて、その瞬間をやり直す  
うとしているのだと．．．

「馬鹿な男だと思わないかね

そんなことをしても傷口が広がる一方、苦しみがどんどん増していくだけだというのに．．

だが彼はそのスタンスを見事貫いた

死にたくない、戦いたくないと思いながらも、戦うしかない、戦場以外生きる道はないという矛盾を孕んだまま今日の今日まで生き残ってきたんだ

私には、それを否定することはできん」

「．．．」

「で、貴方は彼をその後どうしたのです？」

「前線に放り込んださ、私は使えるモノは使う主義でね

その時、かなり顔を歪めて私を睨み付けたが．．どこことなく、安堵感を纏っていたな」

「自分では逃げ道を中々封鎖できない、だから他人に逃げ道を潰させたんですね」



「そう言うことだな

その後だが．．いや、今回はこれまでにしておこう  
丁度到着したようだ」

「そのようですね」

「さて、ここからは別の意味でも戦場だ  
気を引き締めて取りかかれ、以上だ」

もうさぶたいとるとかどうでもいいや

失った時間は取り戻せない．．それは自明の理

たとえその1分1秒、あるいは瞬きする瞬間にバカをやっちゃった  
らもう取り戻せない

コンマ0．1秒でも過ぎ去った過去だ、それに代わる瞬間なんて来  
やしないんだ

さて、君たちは後悔はしたことあるだろうか？

失恋？それとも犯罪？さては掃除当番のサボリとか．．まあ、そ  
んなのは人それぞれだ

後悔のない人生を歩んでいるなんて奴は絶対にいないだろう

もしいたとしたらソイツは人間じゃない、もしくは極上のつまんね  
え奴だ

後悔．．人は後悔するからこそ成長する

罪悪感や悔しさを実感して未来に繋げることが出来る．．．

だがな．．．

だが、まれに大馬鹿な奴がいる

何時までもウジウジと自分の犯したバカな行為に縛られて、盲目に走り続ける愚か野郎だ

走り続ける．．．というのは語弊があるな、正確には逃げ続けてい  
ると言うべきか

こういう奴に限って自分の過去にちょこつつつと触れただけでも  
激怒しやがる

過去と向き合いたくないから、何時までも逃げていたいから、ほじ  
くり返されるのは特別我慢ならないんだ

そして決まって碌でもないことをしでかす

自分に対して盲目になっているから余計に質が悪い

他人がどんなに迷惑を被ろうと構いやしねえ．．．常に保身に走る、  
正当化しようとする

理由は至って簡単、自分が誰よりも可愛いからだ

日常生活でそんな奴いたら間違いないハブの対象だわな

そんな自分本位の大バカは俺は一番嫌いだ

だから、俺は俺が一番嫌いだ．．．だけど、俺が一番自分が可愛い  
こんな矛盾、いつかは断ち切らなければならない

この任務が終るまでには腹を決めねえとな

「．．．なーんて、いつになく真剣に考えてんだ？俺という馬鹿は」  
寝っ転がった状態で自分のほっぺに拳をかます

痛くはない、脳が自傷行為だと判断して力をセーブしてるせいだ、  
その事を思うと何故かイライラする

だが、そのイライラでさえもダルイ．．．何でか知らねえけど  
今現在、完成した不知火・弑型をつんだトラックの荷台に横になっ

ております

このトラックの目的地と俺の目的地は奇しくも一緒なのである

「ふぁ．．．眠」

今日は何故だか憎たらしいほどお天気が良好だ

ものすごく眠気を誘う．．．あ、やべ、早速負けそうだ

数秒もしない内に夢の世界へと足を運んだのは言うまでもない

．．．人を殺した経験がある軍人は帝国で何%くらいいるだろうか？

多分それ程いないんじゃないだろうか、現在の軍のあり方とは対BETAであり間違っても人間じゃない

ましてや国家間戦争などこのところあんまり起きて無いような気がする

言い換えれば、そんな隙を与えないほどBETAの侵略というのは驚異的なものだ

さて、話を戻そうか

俺はその数少ない”殺人組”に入る人間だ

初めて殺したのは国外逃亡を図った時．．．邪魔だった兵士を何人が殺した

アイツらにとっては無念だったに違いない

国民を守るべき衛士が何故、国民である自分を殺さなくてはならないのか

俺だったらソイツを化けてでも復習してやるね．．．末代まで呪つてやるよ

国を出た後の俺だが．．．結構好き勝手やった

衛士という命のやりとりを持つ重責から解放された俺は最高に気分が良かった

多分人生で一番高揚していたんじゃないだろうか？

まっ、兎に角俺は背中に翼が生えた様な気分だったが．．．ソレが冷めた後は最悪だった

人を殺したという罪悪感と逃げ出したという後悔が毎日のように俺を押し潰さんと、襲いかかってきたからだ

数ヶ月のたうち回った俺は、遂に腹を決めたワケだが．．．

そんな事になるなら最初からやらなきゃ良いのにな、本当に馬鹿だよ！！！！

ハッとなって目が覚める

「．．．」

はて、どんな夢を見ていたかーなんてのはお約束通り忘れてしまうモノなのだ

「ふぁ．．．」

未だトラックは揺れている

目的地はそこまで遠くなかったような気がしたが．．．とすると俺が眠っていた時間なんてのはものの数分と言うことになる．．．不思議な事もあるものだ

そうこうしていると、トラックはあるハンガーの前で速度を緩め始めた

「（漸く目的地に到着か．．．）」

荷台から降りて、巨大な鉄の扉が開いたことを確認すると、そちらへ歩き出す

「お？大尉、おはようございます」

「おー、ヴィンセント君じゃないか」

「これが例の弐型ですか」

「そ、漸く組み上がった所だ」

「それにしても、スケジュール的には遅れていたんじゃないですか？」

「気にするな」

唯ちゃんなりの地味な氣遣いだ

これでユウヤ先生もちよつとは大人しくなんじゃねえの？」

「確かに、『何で俺が練習機に』……って愚痴ってた時期もありましたからね」

「拗ねてからじゃ色々と面倒だからな

全く、試験衛士なんてガキと一緒にだな」

「はは、少し共感できますよ」

「つまり、お前はパパ役というワケか」

「まあ、そんなところです」

「なあ、聞いてくれよ

お宅の息子さんが何故か俺に冷たいんだ」

「あー……あいつ日本嫌いだから」

「何やら込み入った事情がありそうだな」

「察して貰えると助かります」

「へいへい、詮索はしないでやるよ

しかし、日本嫌いか……」

それなら俺や唯ちゃんへのあの態度も頷けるな

やれやれ、嫌いな日本人上司が2人か……同情するよ、ユウヤ先生俺だって嫌いな上司の1人や2人はいて、そいつが来ると嫌だもん  
「しかし、何とかなんねえかな……」

困った困った

これでは計画全体に支障をきたすぞ

ガシガシと頭を掻く．．．そんな事しても知恵は湧いて出てこねよ

「ま、上官の苦勞は全然分かんないですね」

「だろうよ」

まったく、下の奴等は良いよな

ただ戦うだけ．．．」

その時、ぴーん！と閃きがともった

「どうしたんです？」

「．．．いんや、ちよつと用事思い出した」

「？」

「あとよろしく」

これは一種の賭かも知れないが．．．まあ、やってみるか  
俺は基地内を走って走って走る、着いた先は．．．

「旦那！！」

「神無月大尉、どうしたんですか？」

イブラヒムの旦那．．．この人の協力は不可欠だ

「ちよつとあの吹雪に用事があるから借りるわ

それと．．．」

「シゲル．．．ちよつと待ってくれ

話が見えないんだが．．．」

「ああん？」

面倒臭えな．．．単刀直入に言うと

アルゴス小隊をしばくんだよ！！！！」

「．．．は？」

「だから協力しろ」

これは戦争じゃあああああああああ！！！！！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9789r/>

---

Sacrifice

2011年8月16日20時58分発行